

ISSN 1344-9710

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信 望 愛

2021 年度



宮城学院資料室年報

— 信・望・愛 — (二〇二一年度)

第27号

宮城学院資料室



第27号

宮城学院資料室

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信

望

愛

2021 年度



第 27 号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言	宮城学院学院長	嶋田順好	3
□論考			5
	『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」		
	宮城学院女子大学	一般教育部教授	小羽田誠治
□資料紹介			19
	あらたなる希望の花を胸に秘め		
	—宮城女学校生徒による短歌の世界(1910年～1940年)—		
	宮城学院女子大学	一般教育部准教授	栗原 健
□資料紹介			35
	『橄欖』第1号～第21号における書誌および目次一覧		
	資料室		佐藤 亜紀
□小論			64
	1943（昭和18）年度卒業生の学籍簿 —宮城高等女学校の「学校挺身隊」—		
	資料室		佐藤 亜紀
□小論			87
	宮城学院の植物たち その3 —トチノキ—		
	宮城学院女子大学	一般教育部教授	木村 春美
□彙報			92
	2021（令和3）年度彙報		
	宮城学院資料室		

〔表紙〕宮城学院礼拝堂のステンドグラス 「降誕」
ガブリエル・ロワール(1980)



巻頭言

宮城学院学院長 嶋田 順好

全国的にオミクロン株の感染爆発が猛威を振るっておりますが、皆様のお手元に『宮城学院資料室年報第27号』が届く頃には、第六波が落ち着いていることを心から願わずにはいられません。厳しい試練のただなかにありつつも、今年度も支障なく年報を発刊できました幸いを心より喜び、この業を導いてくださった主なる神と寄稿してくださった執筆者の皆様に衷心より御礼を申し上げます。

今号は、宮城女学校文学会・校友会が刊行した機関誌『橄欖』に焦点を当てたものとなりました。そのことによってこれまでの『年報』では、ほとんどメインに取り上げられることがなかった「生徒」の自主活動に光が当てられると共に、生徒たちが創作した多数の短歌も紹介することができました。それこそが今回の年報の特徴であり、意義と言えるでしょう。

一般教育部の小羽田誠治教授は、『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」と題して、文学会の創設から『橄欖』の誕生までの経緯を詳らかにしてくださいました。先行の『宮城野』、『萩の下露』、『校報』の緻密な書誌学的調査にも取り組みながら、各々の機関誌の編集・刊行における生徒の自主的な関わりが、どのようなものであったかを分析、考察してくださいました。今後は生徒が創作した作品そのものの分析・考察へと研究が進展していくことを期待させられる論考です。ちなみに小羽田先生は、昨年度から大学で「宮城学院女子大学の歴史」の講義を担当してくださっており、真摯に意欲的に宮城女学校、宮城学院女子大学、宮城学院の歴史研究に取り組んでくださっております。

一般教育部の栗原健准教授は「あらたなる希望の花を胸に秘め—宮城女学校生徒による短歌の世界（1910年～1940年）—」を寄稿してくださいました。栗原先生は大学ではキリスト教学を担当してくださっていますが、若い頃は童話作家になることを夢見ていた方だけに、文学にも造詣の深い方です。『萩の下露』と『橄欖』に発表された多くの生徒たちの短歌を、テーマ別に整理し、簡潔な考察を付して紹介してくださいました。一読した印象は、今から遡ること80年～110年という時の隔たりを、意外にもそれほど感じさせられず、現在の生徒の作品と言われてもほとんど区別のつかない歌もたくさん見出されたことが新鮮な驚きでした。

資料室職員の佐藤亜紀氏は、『橄欖』第1号～第21号における書誌および目次一覧」を作成してくださると共に、「1943（昭和18）年度卒業生の学籍簿—宮城高等女学校の「学校挺身隊」—」に関わる緻密な歴史考証を経た貴重な論考を寄稿してくださいました。後

者は「小論」となっておりますが、文字通り戦時下の容易ならざる時代における「宮城高等女学校」の生徒の動向を、手堅く注意深く明らかにしてくださいました。

佐藤氏は大学で学芸員課程を修了されたことですが、いわばこれまではペーパードライバーにすぎませんでした。しかしながら資料室職員に就任されて以来、俄然、宮城学院の歴史に関する情熱を覚醒され、人間文化学科の大平聡教授の指導を受けつつ、持ち前の直観力、集中力、持続力をよく発揮され、見事な論文を書き上げられました。今後も資料室職員、学芸員としての働きと研究を力強く進めていかれることを期待したいと思います。

今回で三回目となりましたが、一般教育部教授の木村春美先生は「宮城学院の植物たち その3 トチノキ」を寄稿してくださいました。確かなことは宮城学院の自然豊かなキャンパスを木村先生ほどに愛おしみ、そこに自生する動植物に対し慈しみの眼差しを注いでいる方はいらっしやらないということです。それと同様の眼差しを学生たちにも注いでおられるに違いありません。それだけに、今回も単なる樹木の植物学的な紹介の枠を越え、歴史や文化のなかにおいて、「トチノキ」が果たしてきた貢献に関わる興味深い紹介をしてくださいました。私の場合は夜中に外のトイレに行く必要はありませんでしたが、ボットン便所でしたから、その穴に吸い込まれるような恐怖、その穴から幽霊が出てくるのではないかという恐怖と闘うために「月光仮面」の主題歌を大声で歌い続けたことを懐かしく思い起こしました。

ぜひお手元に届いた『宮城学院資料室年報第27号』を紐解いていただければ幸いです。



『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」

宮城学院女子大学 一般教育部教授 小羽田 誠治

はじめに

歴史とは往々にして、勝者の歴史であり権力者の歴史であるが、社会史を専門とする私としては、その舞台裏を支えた者たち、あるいは陰に隠れた真の主体に関心が向く。学校が教育機関であるからには、その真の主体は学生・生徒であると言えるだろう。しかし、彼ら彼女らの声は通常小さく、また未熟であるがゆえに、ないがしろにされ、あるいは復元が困難であったりする。

本稿では『橄欖』がメインテーマであるが、私にとっての課題は、生徒たちがそこにどのように、またどれほど関わっていたのか、ということ进行を明らかにすることである。明治以来、近代日本において「民主」の確立が大きな課題の1つであったことは疑いないが、それに通ずる課題を、生徒たちの「自主活動」に見出すことができるのではないかと考えるからである。そして、これはまた「学生の主体性」が叫ばれる現在にまで通ずる課題でもある。

もっとも、こうした大きな課題を考える前に、『橄欖』成立までの事実関係のレベルにおいても、今一度整理しておく必要性を認識した。このような考証作業が、体制がまだ整わず、また現存する資料も決して多くはない、明治後期から昭和初期にかけての宮城女学校の、当時の様相を復元することの一助になれば、幸いである。

1. 文学会の創設から『橄欖』誕生まで

1921（大正10）年6月30日、宮城女学校において雑誌『橄欖』が創刊された。発行したのは宮城女学校文学会（以下、文学会と略記）。巻頭には当時の英語教師土井晩翠による『橄欖』に題して」という詩が掲載されたことは、『橄欖』を知る者にとっては、広く知られた事実である。創刊に際しては、その喜びが編集後記にて率直に表明されている¹。

橄欖が生れた。私共の橄欖は生れました。喜んで下さい。私共は今たゞ涙ぐんで、美しい、力強い、尊い産聲をきいてゐます。土井先生の祝福の歌に、私共の橄欖の将来は、どんなに輝かしくなつたでせう。どんなに力あるものになつたでせう。

新たな雑誌が創刊されたのであるから、喜ばしいのは当然であるが、しかしこの喜びようはいかがであらうか。これを正しく理解するためには、『橄欖』が誕生するまでの宮城

¹ 『橄欖』1, 66頁。

女学校における文芸活動の歴史を理解しておく必要があるだろう。文学会とはいかなる組織なのか。宮城女学校においてはどのような雑誌が発行されていたのか。差し当たり、これらの疑問から解決していきたい。

a. 文学会の創設とその活動

文学会の創設については、1890（明治23）年とするのが通説のようである。というのは、『宮城學院七十年史』（以下、『70年史』と略記）²、『宮城学院八十年小誌』（以下、『80年史』と略記）³、『天にみ栄え』⁴のすべてにおいてそう記されているからである。特に『天にみ栄え』においては、1911（明治44）年10月に創立25周年記念式典が実施されたときに記念品として刊行された『私立宮城女学校一覽』（以下、『一覽』と略記）を一部抜粋する形で掲載している。また、『宮城女学校五十年史』（以下、『50年史』と略記）に寄稿された田村たみこの「文學會の創立に就いて」と題する報告においても、以下のように述べられている⁵。

今回原田さんよりの御手紙で学校の創立五十年祭を催すから文學會の起原に就て書いて送るやうとの事です、何しろ四十五六年前の事で確たる記録もなく、唯記憶をたどり申し上げて私の責任を果し度いと思ひます。其頃は明治廿三年に國會が開かる時とて何でも彼んでも多數決で取り極めるので、文學會の組織も會長、書記、會計等の選舉も多數決の結果で取り極めた様な次第でありました。

しかし、当時は宮城女学校創立間もない時期でもあり、異説がないわけではない。というのも、1909（明治42）年3月に刊行された『萩の下露』第1号の「初刊の辞」においては、「宮城女学校文學會は明治二十二年の秋に始まり」と記しているのである⁶。これによれば、文学会は1889年創設ということになる。これはどのように考えたものだろうか。

これらのなかで最も古い、つまり創設当時に最も近いのは、唯一1889年とする『萩の下露』第1号である。しかも、「初刊の辞」の執筆者の深田康守は国語教師であるから、その点においても記述の信憑性は決して低くはない。しかし、単純な誤記あるいは誤認である可能性がないわけではない。

他方、1890年とする記述のなかで最も古いものは『一覽』であるが、これも時期的には『萩の下露』第1号より多少遅れる程度であるし、何より宮城女学校として学外に向けて刊行されているものであるから、いわば最も権威のあるものである。また、『50年史』についても、本人があくまで記憶に頼っていると言っていることには留意しなくてはならない

² 『70年史』, 11頁。

³ 『80年史』, 107頁。

⁴ 『天にみ栄え』, 224頁, 449頁, 857頁。

⁵ 『50年史』, 164頁。

⁶ 『萩の下露』1, 1頁。

が、国会開設という歴史的出来事とともに想起したのであるから、信憑性は高そうである。

以上より、通説を確認したに過ぎないことにはなるが、文学会の創設は 1890 年とするのが妥当であると思われる。では、文学会はどのような活動をしていたのかというと、創設当時の状況を記したものとしては、『50 年史』の記述が最も具体的であるので、以下に引用する⁷。

毎月雑誌を発行して其名を宮城野と名づけ、各自が書き一冊の本として應接室に置いたものです。文章、新体詩、小説、学校の報告等でありました。而して年一回大々的大會が舉行せられて、知事閣下師團長閣下、諸學校長始め知名の士をお招きして茶菓を供して互に發展したものでありました。其頃すでに第二高等學校で文學會の催しがありまして、我が校よりも大會毎に校長はじめ役員が招かれて居りました。何でも高校でやる事は我々の學校でもやるのですからセツキシピヤーの劇があれば、此次には我校でもやると云ふた風で、高校の向ふ張りをした様な次第で男のやる事は女でも出來ると思ふて勵んで勉強したものでしたが、何しろ全校で三四十名の生徒でしたから何を相談しても直ぐ極ると云ふた様な譯でした。

即ち、雑誌『宮城野』の発行が筆頭に挙げられているほか、年に一度の大会ではシェークスピアの劇などが上演されていたことがわかる。

b. 『宮城野』から『萩の下露』へ

雑誌『橄欖』をテーマとする本稿では、これらの活動のなかでも『宮城野』に焦点を当てるが、まず注目すべきはその発行ペースである。1890（明治 23）年と言えば、宮城女学校の創立からわずか 4 年後であり、それだけでも当時の文芸活動に対する熱心さをうかがうことができるが、毎月 1 冊とは、相当なペースで発行されていたことがわかる。

『宮城野』はその後、1909 年に至るまで、およそ 20 年間で 107 冊発行された⁸。平均すると 1 年あたり 5 冊強であるから、発行ペースは落ちたのかもしれないが、それでも十分速いペースであると言って良いだろう。ただし、現存するものは見つかっておらず、内容については残念ながら知ることはできない。

しかし、その『宮城野』の歴史はそこで幕を下ろし、『萩の下露』に引き継がれることとなる。その経緯もまた、『萩の下露』第 1 号の「初刊の辞」において詳しく述べられている⁹。

されど、ただちり失せざらんが爲にとて、僅かに、一部をかきしるせるにとゞまり、普く人の見るべきにもあらで、遂に、文箱の底のものとしもなりはてぬるがくちをし

⁷ 『50 年史』、164 頁。

⁸ 『萩の下露』1、1 頁に「宮城女學校文學會は明治二十二年の秋に始まり、つぎ／＼にものして、それが雑誌を宮城野となづけ、號をかさねて、すべて、百〇七號とはなりぬ。」とある。

⁹ 同上、1～2 頁。

ければ、いかで、かひあるさまに、なしかへばやとて、こたびよりは、活版を用ゐてその數を多くし、更に號を改め、名をも、宮城野に因みて萩の下露とぞおほせつる。みかさとまをせとよまれし名所は、名のみになりて、今は、そのなごりだに無げなるこそあたらしけれ。こは、雨にまされる大御代の恵みに、なりたゝむ子等の、作りいでむ文は、ありし秋萩の下露のしげきの如く、よみいでむ歌は、その露のきよきが如くなれかしとてなむ、あはれ、この雑誌のいや榮えに榮えて、秋萩をめづるが如く人のほめたゝふるに至らば、この會のほいなりとやいはまし。

つまり、手書き原稿1部のみしか作成しなかった『宮城野』を『萩の下露』と改名し、活版印刷が用いられることになったのである。この名前の由来はというと、神の恵みで育った生徒たちの作品が、萩の葉の下につく露のように清く、榮えるように、ということのようだとわかる。『萩の下露』は『宮城野』を発展的に継承したものと考えて良いだろう。

『萩の下露』時代の文学会の活動については、『一覽』に詳しい¹⁰。

本校文學會ハ明治廿三年九月ノ創設ニ係リ本校當局ノ監督指導ノ下ニ生徒之ヲ經營シ本校教職員生徒ハ當然之ニ屬スベキモノトス

本會ハ毎月一回例會毎歲一回大會ヲ開ク本年度ヲ以テ第廿回大會ヲ開クニ至レリ又本會ノ記事ヲ收録シテ雑誌『萩の下露』ヲ發行ス

これは文学会の概要を示した前文であるが、第6条には、雑誌の発行に関する規定がある¹¹。

毎月一回會員ノ寄稿及ビ本會ノ記事其他有益ノ事項ヲ輯メテ雑誌ヲ編成ス

ここにおいても、「毎月1回」という発行ペースが掲げられているが、しかし、現実とはそうではなかった。第1号が1909年3月発行であることはすでに見たが、続く第2号は、これより1年以上も後の1910（明治43）年5月であった。また、第3号は確認できていないが、第4号に至っては、1914（大正3）年3月と、第2号発行から4年も経っていた。その後、第5号は1915（大正4）年6月、第6号は1916（大正5）5月、第7号は1917（大正6）年5月と、ほぼ1年1号のペースに落ち着くが、当初規定されていた毎月1号とはほど遠いペースとなってしまったのである。

このことは、規程のうえからでも確認できる。『萩の下露』第4号には、『一覽』と同様の規程が収載されているが、ちょうど第6条の部分のみが削除されている。そして、『萩の下露』第5号が発行された1915年からは「宮城女學校文學會規定」が新たに制定されており、その第11条では、「雑誌部ニアリテハ毎歲一回機關誌「萩の下露」ヲ發刊ス」となっている。つまり、実情に合わせて規程を改定していった過程が如実に示されているのである。

¹⁰ 『一覽』、31頁。

¹¹ 同上、32頁。

活版印刷を導入して、文学会による文芸活動のさらなる発展を企図した『萩の下露』は、必ずしも想定した成果をあげられなかったのではないだろうか。

c. 『萩の下露』から『校報』へ

そんななか、1918（大正7）年10月、突如『校報』という雑誌が発刊された。『校報』第1号の「創刊の辞」によれば、その趣旨は以下の如くである。

「校報」の發刊に就ては、多くの辯を要しないと思ふ。本報は新しき企劃から生れ出たのではなく、實は宮城女學校文學會及同窓會より刊行し來つた刊行物を合併したものに聊か更張を加へたに過ぎないのであります。本報の刊行は年二回とし、第一回は六月、第二回は十二月に發行することに定めて置きます。（中略）

叙上の如く、「校報」發刊の目的は、世の未だ本校を知らざる數多き友に宮城女學校を紹介せん希望を達すべく、本校職員、同窓會員、生徒及び校友の間に「家庭の火の消えぬ」やう斷えず燃料を供給せんことを期するのであります。

さて、このような『校報』の意義について、どのように理解したものだろうか。『校報』は「宮城女學校文學會及同窓會より刊行し來つた刊行物を合併したものに聊か更張を加へた」とは言うものの、当時の同窓会においてどのような刊行物があつたのかは定かではなく、少なくとも定期刊行物と呼べるようなものはなかったと考えられる。また、『萩の下露』には教職員による講演や論考、「同窓會消息」というコーナーなども設けられており、雑誌の構成は『校報』とほぼ変わらない。したがって、何を合併し、何を加えたのか、判然としないのである。

それでは、『萩の下露』から『校報』になることで何が変わったかと言えば、大きな点としては、発行者と発行ペースの2つである。前者については、文学会から宮城女学校になった。後者については、ここに定める通り年2回が守られていたので¹²、『萩の下露』より頻度が上がっているのは間違いない。

とすると、考えられるのは、文学会による雑誌の発行が当初想定していたよりも不活発だったことを受けて、まさに「家庭の火の消えぬ」やう斷えず燃料を供給」するべく、教職員が主導となって出版活動に乗り出した、ということである。1918年と言えば、宮城女学校に第二校舎が完成した年であつた。また、この数年前から家政や音楽といった専攻科が設置されるなど、いわば躍進を遂げようとしていた時期であつた。あるいは『校報』は「広報」に通じるので、もしかしたらこの時期に、学校としての広報活動の必要性を痛感し始めていたのかもしれない。いずれにせよ、文学会の出版活動を不十分と見た学校側

¹² 筆者が確認できた『校報』は第1号から第4号までであり、その範囲においてのみ年2回であつたと断定できる。ただ、後述するように、1926年に刊行された『橄欖』が、『校報』第17号との合併号であつたことは確実であるので、1918年から1925年までの8年間で16冊が発行されていたこととなり、年2回のペースはほぼ間違いないであろう。

の焦りや苛立ちのようなものが窺える、とまで言うのは言い過ぎであろうか。

ただし、付言しておく、雑誌の発行は活発ではなかったものの、文学会の活動全体については、盛んになっていると見て良いのではないだろうか。というのも、1915年に制定された新規程によれば、文学会は文学部、会計部、雑誌部、運動部の4部に分かれて運営されるようになっており、より系統立った組織運営が図られているように見受けられるからである。

d. 「自主活動」考（その1）

発行者に話が及んだところで、ここで一旦、歴史の流れを断ち切り、文学会という組織の性質について今一度考察してみたい。その創設に関して言えば、たとえば、『70年史』には「本校では文学会が生徒自体の手によつて創設運営され」とある¹³。また、『天にみ栄え』には「生徒達によって文学会が創設され」とあり¹⁴、『萩の下露』が創刊されたことに関しても「これは生徒の文芸活動の隆盛活潑を示すもの」と言う¹⁵。このように、文学会が話題になるとき、基本的には「生徒の自主活動」というニュアンスで語られるのだが、実態はどうだったのだろうか。

まず、文学会の会員であるが、『宮城野』時代については史料がないため、詳細はわからない。先に引用した田村たみこの「文學會の創立に就いて」には、「文學會の組織も會長、書記、會計等の選舉も多數決の結果で取り極めた」とあり、これだけ読めば、民主的な自主活動組織のように思えるが、肝心の会員資格や選挙資格、被選挙資格者が定かではないのである。それらが明らかになるのやはり『萩の下露』時代であり、『一覽』には以下のようにある。

第三條 本會ハ宮城女學校生徒ヨリ成ル

第四條 本校職員ニシテ本會ヲ贊助シ毎月金七錢以上ノ金品ヲ寄附セラル、トキハ贊助員ト稱ス

そして、会務を処理するために、会長1名、副会長2名、委員6名を置くとしているが、第8条には以下のように定めている。

第八條 會長ハ委員會ノ決議ニヨリ贊助員中ヨリ推薦ス¹⁶

つまり、文学会の会員は生徒であったものの、会長は賛助員即ち教職員から選ばれていたのである。このことは実際の運用としても確認でき、会長および副会長は以下のとおりである。

¹³ 『70年史』, 11頁。

¹⁴ 『天にみ栄え』, 224頁。

¹⁵ 同上, 412～413頁。

¹⁶ 以上、『一覽』, 31～32頁。

年度	会長	副会長	副会長
1908	ミラー校長	村上先生	原田先生
1909	ワイドナー校長	村上先生	
1910	ワイドナー校長	村上先生	中村先生
1911	ワイドナー校長	村上先生	中村先生
1912	ワイドナー校長	村上先生	小野先生
1913	ワイドナー校長	村上先生	小野先生
1914	ファウスト校長	村上先生	小野先生

ここから、会長は教職員のなかでも校長が選ばれるというのが慣例だったようであり、副会長もまた慣例的に教職員がこれに就いていたことがわかる。さらに、1915年以降の新規程においては、4部制になったことにより役員制度が改定されたが、そこでは以下のように規定されている¹⁷。

第六條 本會役員ハ會長一名、部長數名、委員數名ヲ置キ任期ハ一ケ年トス但シ會長ハ校長、部長ハ職員、委員ハ生徒トス

4部制になったあとにおいては、かつての副会長を各部長と改編する形で、これまでの慣例を制度化することになったのである。

以上、文学会は史料で確かめられる限りにおいては、生徒たちを会員とする組織でありながら、その役員については、トップはあくまで教職員であった。こうした性質を理解しておく必要があるだろう。そして、そのうえで、文学会が刊行していた『萩の下露』がなくなり、宮城女学校の刊行する『校報』へと変わっていったのである。

e. 『橄欖』の誕生

以上のような経緯を知れば、『校報』創刊から3年後の1921（大正10）年に文学会が『橄欖』を創刊したことが、なぜ冒頭に示したような喜びをもたらしたか、理解することができよう。『橄欖』はいわば、文学会再興ののろしだったのである。

それでは、『橄欖』は生徒たちの手によって作られたのか、というと、そういうわけでもなさそうである。当時の教員の1人である黒澤良平は、次のように回想している¹⁸。

「萩の下露」は一時中絶して居たが、大正十年から名も元祿式から聖書的な「橄欖」となりて再興された。是れは小野玉枝先生の御盡力で命名も同先生がノアの方舟の小枝からの思ひ付きかと察せられる。

もちろん、このことは生徒たちもしっかりと認識しており、自らの力不足とともに、教

¹⁷ 『萩の下露』5, 79頁。

¹⁸ 『50年史』, 165頁。

員（小野先生）に対する感謝の気持ちを率直に表している¹⁹。

私共なんの働きもしなかつたものでさへも、こんなに嬉しくつてたまらない程の感激をあたへられてゐるんですもの。御忙しい中をさいて全力をあげて編輯の事から、装訂の世話までなさつて下さつた部長の小野先生は、どんなに喜んでいらつしやるかを思はずに居られません。殊に先生は生れ出た可愛い子の名づけの親でいらつしやるんです。

しかし、それでも生徒たちがこの『橄欖』創刊をめぐって、これまで以上に主体的に関わっていたことは、この喜び以外に、組織の面からも推測できる。というのは、『橄欖』第1号に記された「文學會報告」によれば、これまでになかったことが起こっているからである²⁰。

四月二十二日（金）放課後、寄宿舎の自修室にて大正十年度文學會委員の選舉會を開く。

例年の選舉法を改め、單數候補をあげ、會員の賛否を尋ね、會員全部の賛成を受け、左の通り定む。

と、このように記したあと、会長としてファウスト校長を選んだのち、委員長として英文科2年生の中村きくよという生徒を選出しているのである。4部長よりも先に挙げられていることから、その地位の高さが窺えるだろう。

この委員長という役員がどのような性質のものであったのか、規程は見つからない。『橄欖』自体は雑誌部の活動によるものだったため、委員長とどこまで直接の関係があるのか、確実なことは言えない。とはいえ、わざわざ選挙法を改めたことと新たな雑誌の創刊が、単なる偶然の一致とも思われな。『橄欖』の誕生は、生徒による自主活動の高まり、あるいはそれを望んだ教職員による支援、という大きな文脈のなかに位置づけて理解すべきだと考えられるのである。

ところで、『橄欖』の誕生によって『校報』はどうなったかと言えば、註8にも述べたように、年2回のペースを維持して、刊行され続けたようである。即ち、ここに宮城女学校の『校報』と文学会の『橄欖』という体制が構築されたことになる。このことは、『校報』と差別化できたという点において、『橄欖』が生徒たちのものであるという意識をさらに強めたかもしれない。

2. 『橄欖』初期の苦難と混乱

さて、このような紆余曲折を経て誕生した『橄欖』のその後の歩みは、どのようなものだったのだろうか。生徒の自主活動は、期待通りの成果をあげ、実を結んだのだろうか。

¹⁹ 『橄欖』1, 66～67頁。

²⁰ 『橄欖』1, 63頁。

教職員はそこにどのように関わったのだろうか。これについてもやはり、雑誌の発行状況やその母体となる組織という点から考察していこう。

a. 文学会から校友会へ

これまで見てきたように、『橄欖』を発行したのは1890年以来の歴史を持つ文学会であったが、この文学会は、『橄欖』創刊翌年の1922（大正11）年に校友会と改称される。その経緯について、『橄欖』第2号には以下のように記されている²¹。

年毎に多数の姉妹達を迎へて我が文學會は次第に規模が大きくなりましたので、ここに校友会と改名して益々本會の發展を計ることになりました。

ところで、この文学会から校友会への改称についても、正確な時期については検討を要する。というのも、『70年史』、『80年史』、『天にみ栄え』のいずれも1921（大正10）年としているからである²²。しかし、『70年史』には「校友会雑誌「橄欖」が「萩の下露」に代つて創刊されたのは、大正十年（一九二一）六月三十日のことであつた。」とあり、『80年史』には「更にこの大正十年宮城女学校文学会は改称されて「橄欖」を年一回刊行することに改めた。」とあるように、『橄欖』創刊に合わせて改称されたかのように書かれているが²³、『橄欖』第1号にはそのようなことを示す記述は見当たらないため、おそらく誤りである。つまり、『70年史』以下は、文学会から校友会への改称の経緯について誤った理解をしており、そのうえで1921年としているのである。

もっとも、上に見た『橄欖』第2号の記事には校友会が成立した日付までは記されておらず、第1号発行後の1921年7月から第2号発行前の1922年4月までの間であることしか特定できない。よって、結果的に通説の1921年が正しい可能性が全くないわけではない。とはいえ、実質的な活動を年度単位で考えるなら、校友会の活動は1922年度から始まったと言えることはできるだろう。したがって、本稿では通説を訂正して、1922年に改称されたものとしておきたい。

それでは、文学会から校友会へとなることで、どのような点が変わったのだろうか。『橄欖』との関わりの深いところ限定して見ていくと、1つには、かつての「文学部、会計部、雑誌部、運動部」という4部制が、「文芸部、運動部」の2部制に改編されていることが挙げられる。即ち、雑誌部がなくなり、第6条において「文藝部ハ毎歳一回雑誌「橄欖」ヲ發行ス」²⁴と規定されたのである。ただ、文芸部長は2名（いずれも教職員）置いていたようであり、かつての文学部と雑誌部を単純に合併させたものと考えて良いだろう。つまり、文学会から校友会へと組織名は変わったものの、『橄欖』発行という点から見れば、

²¹ 『橄欖』2、49頁。

²² 『70年史』、26頁。『80年史』、36～38頁。『天にみ栄え』、863頁。

²³ 『天にみ栄え』には、改称されたという“事実”が記載されているのみである。

²⁴ 『橄欖』2、50頁に掲載する「宮城女学校校友会規則」による。

特に影響はなかったと考えられる。

そして、興味深いことに、その影響のなさを自ら示すかのように、校友会とすでに改称されているはずの『橄欖』第2号においても、発行者は相変わらず「宮城女學校文學會」となっているのである²⁵。さらに、編集後記も「雑誌部委員」として書かれていることも注目に値する²⁶。

実は、「雑誌部委員」という呼称の方は第3号以降は用いられなくなったが、発行者「宮城女學校文學會」の方は、第7号まで継続することとなる。組織が改称されたという事実を当事者たちが知らないとは考えられないので、この混乱ぶりを理解するのはいささか難しい。『橄欖』編集委員にとっては、新たになった校友会よりもかつての文学会の方にアイデンティティーを感じていたということだろうか。これについては、後述する。

b. 委員会の苦しみ

次に、『橄欖』における文芸活動の様相を詳しく見ていきたい。結論から言うと、生徒中心の『橄欖』の船出は、決して順風満帆というわけではなかったようである。というのは、上に見たように発行に際しては小野先生の力添えを得なくてはならなかったし、原稿の集まりとて決して十分なものではなかったからである。その辺りの事情については、第1号の編集後記に率直に語られている²⁷。

雑誌の発行のおくれた罪も、又原稿の集らない私共の不平も、又この雑誌の内容がたとへ貧しく、つまらないものであらうとも、物足りない點も、生れ出たと云ふこの尊い事實のまへには、すべては忘れられてたゞ涙ぐんで居ります、みんな一人々々の手をにぎって喜び合ひたい様な氣もちです。

しかし、自らの力の及ばなさを痛感しつつも喜びと希望に充ちたこれらの編集後記からは、生徒たちの意気込みがひしひしと伝わってくるだろう。その苦しみと意気込みのせめぎ合いは、第2号以降も基本的には変わるものではなかった²⁸。

主に卒業生を中心としてより充實した橄欖の第二號を出さうとして私共は大希望を以て準備にとりかゝつた。けれどあまり原稿がおもはしく集らないので途中でいや氣がさした、あまりみんなが大家ぶつて書かないので何も出来ないやうな氣がして。

(中略) けれどこんなものでも出来ればうれしい氣がする

第3号は、多少とも軌道に乗ってきた兆しを感じさせるものではあるが、十分な成果を得たと言うにはほど遠い状況であらう²⁹。

²⁵ 同上、奥付。

²⁶ 同上、56頁。

²⁷ 『橄欖』1、66～67頁。

²⁸ 『橄欖』2、56頁。

²⁹ 『橄欖』3、60頁。

いつまでも産まれたばかりの赤ん坊では居れません、内からは生命が高鳴って響きます。すくすくと力が動いて来るではありませんか。やつと片言まじりに小さいお話しをするやうになりました、ずい分滑稽な會話でせう、その無邪氣なあどけない顔にあなたも思はずやさしくほゝ笑まるゝかもわかりません。しかしそれによつて少しでもあなたの心を和げることが出来ますなら私達は満足いたします。

何といつても、やつと生長して來た子供です。未來をもつてるものだといふことを覚えて下さい、そしてまつすぐに、いゝものに大きくなる様にいつも祈つて下さい。そんななか、小野先生ともう1人の協力者と思しき岩間よし先生が編集から離れ³⁰、第4号は生徒のみで制作されたため、その苦労はさらに大きくなった。編集委員によって感じ方は当然異なるが、それぞれの感想に耳を傾けてみよう³¹。

本號はどうしても夏休み前に出すべき豫定のものであつたが原稿の集まらないのや委員の缺席などの關係から／＼ずる延びて今頃原稿の校正等とは早くから寄稿して下すつた方々に對して誠に濟ないと思つてゐます。しかし止むを得ぬことであつたからたゞお詫をするより仕方ありません。

随分澤山の方々が投稿して下すつたが紙數の都合や校友會雜誌としては掲載出来ないやうなものの中にはありましたから全部をとることは出来ませんでした。例年のやうに何か英語のものを西洋の先生にお願いしたいと思つたのですがそれも餘り急なので間に合ひませんでした。

今度といふ今度は全く牧者もなく荒野にのつ放しにされた羊の群のやうに委員にのみまかせられたのでかなり苦しいものでした。どうかして美しい立派なものが生れ出づるやうにと願ふのは母のみの願ではありません。私達は毎日首を延ばして待つてゐました。が結極生れ出たものは貧弱な赤坊でした。私達は痛ましい心で眺めました。けれどもどこかしら捨てられないやうな愛着を覚えました。やつぱり私達やあなた方の尊いひとり子なのですもの。兎も龜も嬉しいことです。

あるいは生徒の間に『橄欖』に対する認知は広がり、投稿自体はそれなりにたくさんあったことを窺わせるが、いかんせん質的な面で十分ではなかったことがわかる。次の第5号にしても、同様である³²。

第五號の橄欖をものしたことに就て委員が経験した悩み、又申さなければならぬお詫は毎年繰り返されることと同じです。原稿が集らないこと。私ども委員の力のたりないことなど――。多くの方が橄欖は委員の手品でゞも作り出すものだと思つてゐらつしやるのではないでせうか。橄欖は「みなさま」の中に生れ出すべきものなのです。

³⁰ 同上、61頁。

³¹ 『橄欖』4、40頁。

³² 『橄欖』5、奥付。

なお、このように毎年原稿集めに苦労していた様子は、その作品の質はともかく、ページ数として如実に表れている。第1号から第5号までの総ページ数は以下の通りである。

第1号	第2号	第3号	第4号	第5号
68ページ	56ページ	61ページ	41ページ	38ページ

多少の起伏はあるものの、漸減傾向にあったことは明らかであろう。

だが、こうした活動も、1926（昭和元）年の第6号において転機が訪れる。委員たちの努力も空しく徐々にページ数を減らしていた『橄欖』であったが、創立40周年に当たっていたこの年は、なんと140ページに達したのである。理由は、40周年というだけではなかった。その状況を具体的に見てみよう³³。

本号は本校創立第四十年記念号として特別に編輯し在米在校生徒間に配布した橄欖と學校より卒業生に頒つ校報とを合併致しましたから橄欖の第六号であり校報の第一七号に相当します。此の合併は來年度より繼續せらるゝ者か今回限りの舉であるかは未定であります。今回の記念号に依り同窓諸姉と在校生と本校との一致の精神が一層密接となる事が出来れば編輯者の満足是に越したことはない、同窓會の方々から又其幹部の方々から澤山に原稿を下されたことを感謝致します。

即ち、かつて『萩の下露』が一旦『校報』に改編されたのが、そこから独立する形で文学会の復興を表した『橄欖』であったが、今度は『橄欖』の方が『校報』を合併して発行したのであった。毎年原稿集めに苦労し、一喜一憂していた生徒たちの満足感と安堵が、察せられるだろう。

ところで、合併により原稿は集まったものの、翌号以降はどのようにするのかという問題をはらんでいたが、この点はどうなったのだろうか。結果として、『橄欖』はこのまま『校報』を合併した形となり、発行を続けた。そうすることで、原稿の問題は解決し、第7号こそ80ページほどであったが、第8号以降しばらくは毎号100ページを超えるものを発行することができたのである。

c. 「自主活動」考（その2）

こうした『橄欖』の動向の裏には、生徒の自主活動をどう捉えるか、という視点もついて回っている。『橄欖』の誕生が、生徒によるこれまでにないほどの自主活動意識の高まりを表しているということはすでに述べたが、その後はどうだったのか、ということである。

実は、『橄欖』誕生時に置かれた役員「委員長」は、文学会が校友会に改編されるに及んで消滅した。代わって副会長1名が置かれ、教職員が選出されることと規定された³⁴。

³³ 『橄欖』6、129頁。

しかも、その選出方法に至っては、以下のように規定されている³⁵。

第九條 會長ハ本校々長ヲ推戴シ、副會長及部長ハ賛助會員中ヨリ互選シ、委員ハ生徒ノ互選トス。

「單數候補をあげ、會員の賛否を尋ね」ていた選挙法は踏襲されず、「副會長及部長ハ賛助會員中ヨリ互選」することとなった。つまり、『橄欖』誕生時に見られた生徒の地位の高まりは、わずか1年で後退したのである。

しかし、このような校友会の流れと、『橄欖』の自主性とは、必ずしも軌を一にしない。第4号と第5号では確かに、生徒のみで——その結果大いに苦しんだのであるが——『橄欖』を発行しているのである。この点に、教職員が生徒を指導する形で運営していた校友会と、生徒自らが編集し文学会を名乗り続けた『橄欖』編集委員会との間に、棲み分けともせめぎ合いとも解釈できる微妙な関係が見て取れるのではないだろうか。

『橄欖』の編集において、校友会との微妙な関係、即ち生徒たちの自主独立への憧れや矜持を見出せる点は、他にもある。というのは、まさに教職員の手を離れた第4号と第5号においては、内容のすべてが文芸作品で構成され、他号では必ず掲載されていた校友会をはじめとする活動報告の類が、全くなくなっているのである。これは単なる偶然でも、編集上の不備でもない。なぜなら、『橄欖』編集に携わった生徒たちが何を目指していたか、第7号の編集後記に克明に述べられているからである。

今年は一昨年のように文藝雑誌を作る豫定であつたが出來上つてみるとやはり校友会雑誌の形式をぬけ出なかつた。淋しいと思ふけれどもこれも經費の都合上致方がない。

つまり、『橄欖』は第6号以降、『校報』と合併した代わりに、旧来の形式に改めざるを得なかつた。それは文学会を捨てて校友会に収まることを意味した。現実的な対応と知りつつも、夢をあきらめる気持ちだつたのではないかと察せられるのである。事実、第8号からは、発行者はついに宮城女学校校友会となった。そして、これ以降、生徒たちが編集後記を書くこともなくなったようである。

以上、自主活動意識の高まりとともに誕生した『橄欖』は、苦しみのなかに夢を追った波乱の時期を経て、その挫折の末に、校友会雑誌として地位と安定を得ていくことになったのである。

おわりに——エピローグ——

第8号以降の『橄欖』は、発行ペースやページ数を見る限り、安定したものとなった。1929（昭和4）年に発行された第9号からは、同窓会のための記事も増えた。それは、そ

³⁴ 『橄欖』2、50頁に掲載する「宮城女学校校友会規則」による。

³⁵ 同上。

の前年に同窓会にて、会費の値上げ案が可決され、会費前納の会員に『橄欖』を送ることとしたことと関係するだろう³⁶。そして、1933（昭和8）年には、規程を改定して毎年2回の発行に増やしている。こうして『橄欖』は、宮城女学校の生徒を正会員、教職員を賛助員とする校友会の発行する機関誌として、本学の発展に歩調を合わせるように発展していったのであった。

一方、『橄欖』の初期——それは同時に文学会の末期であったが——は、苦難と混乱に満ちた数年間であった。しかしここには、大正デモクラシーの時代思潮に乗ったかのように、生徒たち自らが主体となって文芸活動、創作活動を行いたいという、強い心意気が感じられた。繁栄に至ることなく、挫折とともに幕を閉じた『橄欖』初期の試みについても、私たちは記憶にとどめておく必要があるだろう。

以上、本稿では、雑誌の発行とその組織という、いわば形式的なところから『橄欖』の性質について考察してきたが、そのため作品の内実にまで踏み込むことはできなかった。生徒たちにとっての『橄欖』の意義を理解するためには、作品分析を通じて生徒たちの精神世界をより深く考察する必要もあるだろう。今後の課題としたい。

³⁶ 『70年史』、143頁。



あらたなる希望の花を胸に秘め
—宮城女学校生徒による短歌の世界
(1910 年～ 1940 年) —

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健

青々とした松の木や、天までとどくやうなポプラの木や、銀杏櫻等の木にかこまれて、建つて居る赤煉瓦のスクール!! これは私共の大好きな学び舎で御座います。校舎の裏には、広い校庭が御座いますそして [ママ]、クローバーが生え茂る頃には、二百余の姉妹達が、暖かい春の日光を浴びながら、テニス、ブランコ、バスケットボール等の面白い遊びを致します。

テニスのお上手な四年級の S 様は、我が校に於ける運動家で御座います。又、熱心な姉様方によって催される秋の文学大会は、我が校の誇とする所で御座います。校長先生をはじめ、皆御やさしい先生方でいらつしやいまして、常に私共を、愛と、正義とを以つて、御導き下さいます。一日の業を始むる前には、是非神様に、『今日一日を罪少なく、清くおくらせて下さいませ。』とお願ひし、又、切に祈るので御座います。[略] 私はこんなに清い学び舎に学んで居る自分を、ほんとに幸福に思つて居ります。(澤口勝子「我が学校」)¹

文芸を愛する宮城女学校の有志によって結成された宮城女学校文学会は、1890 (明治 23) 年以降、機関誌『宮城野』『萩の下露』『橄欖』を生み出して行った (この変遷の過程については、本誌収録の小羽田誠治の論考に詳しい)。ここには生徒・同窓会員等の手になる論説、随想、短編小説、戯曲、翻訳、詩、紀行、短歌、童謡、行事参加の手記、近況報告等が掲載されており、当時の在校生や関係者たちの肉声を伝える貴重な史料となっている²。

冒頭に掲げた一文は、『橄欖』創刊号に収録された 2 年生の作文である。書き方はこなれていないが、当時の少女小説を想起させる麗しい空間として自らの学校を表現したい生徒の意欲が伝わって来る。このような学校生活を送りながら、彼女たちの胸にはどのような想いが去来していたのであろうか。

本稿の目的は、『萩の下露』『橄欖』に掲載されている短歌をたどることにより、当時の生徒たちの日常生活と、そこで展開されていた心象世界を垣間見ることである。無論、こ

¹ 澤口勝子「我が学校」『橄欖』1 号 (1921 年)、21-22 頁。

² 小羽田誠治「『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の『自主』」本誌、5-18 頁。『橄欖』各号の収録内容については以下に列記されている。佐藤亜紀「『橄欖』第 1 号—第 21 号における書誌および目次一覧」本誌、35-63 頁。

うした作品は文芸創作であって、実際の生徒の体験や心情をそのまま活写したものとは限らない。単に個人的な情景を描いたもの、少女雑誌等に掲載されている挿絵や文学作品から想を得たものも多々あると考えられる。また、学校生活の喜びを詠んだ歌よりも心の葛藤や痛みを描いた作が多いのは、そのようなテーマこそ歌の材料としてふさわしいと考えられていたためであろう。題材に偏りがあることは否めない。

しかしながら、身近な者に読まれることを想定しつつ公刊された作品である以上、生徒たちが分かち合っていた想いや関心事、かくありたいと願う憧れの姿がここに表現されていることは確かである。心の断片を切り取ることができる短歌は、現在の SNS のようなつぶやきを伝える媒介であったと言える。或いは、自分が見せたいイメージを自撮りして公にすることに近いのかも知れない。ここから彼女たちの心性や美意識をうかがうことができる。

本稿では、「学校風景」「友情」「煩悶の情」「望郷の念」「死者を偲ぶ」「信仰と祈り」「明るい日常」「社会への反応」「幻想と恋」の категория に分けて、生徒たちの作品群を紹介していきたい。各歌の後には作者名、記載の雑誌（『萩の下露』は「萩」、『橄欖』は「橄」と表す）と号数、頁番号を付け加える。作品中の漢字は、読みやすさを考慮して旧字体から新字体に改めたが、仮名づかい、送り仮名は原文のままとしてある。繰り返しを示すくの字点は「／＼」「／＼」と表記した。なお、本稿で使用している各雑誌の刊行年は下記の通りである。一時期の間、年刊ではなくなっている。

『萩の下露』第2号（1910年 明治43年） 4号（1912年 明治45年 / 大正元年）

『橄欖』第1号（1921年 大正10年） 2号（1922年 大正11年） 3号（1923年 大正12年） 4号（1924年 大正13年） 5号（1925年 大正14年） 6号（1926年 大正15年 / 昭和元年） 7号（1927年 昭和2年） 8号（1929年 昭和4年） 9号（1930年 昭和5年） 10号（1931年 昭和6年） 11号（1932年 昭和7年） 12号（1933年 昭和7年） 13号（1933年 昭和8年） 14号（1934年 昭和9年） 16号（1935年 昭和10年） 19号（1937年 昭和12年） 21号（1940年 昭和15年）

【学校風景】

よく出来し今日の試験に身も軽くかへる家路の桃の花かな （川下美智子 橄14 82頁）

宿題をせずに寝た夜の夢路には必ず見ゆる先生の顔 （伊藤京子 同）

そよ／＼と睡りをさそふ春風の吹き来るなり教室の窓 （鈴木嘉子 同 83頁）

復習は床の中でと寝ねたれどたちまち夢になりにはけるかな （多恵 橄9 121頁）

目をとちて明日の宿題思ふ時のどかにひゝくピアノうらめし （篤子 同 120頁）

熱心な講義を外にしみ／＼と見入る蒼空のいと美しき哉 （瑛子 橄2 46頁）

洩れて来る青葉の風の涼しさに今日の試験の苦勞忘れぬ（丹野静子 橄 16 25 頁）
聞く人の心々にまかせ置きてさりげもなしや寄宿舎のベル（そよ女 萩 4 16 頁）

いつに変わらぬ学校風景を詠んだ歌であり微笑ましくなるが、こうした日常をユーモラスにとらえた歌は少数である。歌材として卑近で美意識に欠けるものとされたのであろうか。恐らく、戯れに詠まれたために生徒の側も投稿するに値しないと考えたのであろう。最後の一首は、時刻を伝えるベルに追われて慌ただしく一日を過ごす日常を描いた作文に添えられたものである。

学舎や寮での何気ないひとときをとらえた作品は、抒情的で印象深い。ビジュアルで想像すれば、中原淳一や加藤まさをが描く女学生を彷彿させるものがある。

寒き夜にピアノを弾けばほのかなるいぶきにくもる白き鍵盤かな（美枝子 橄 9 120 頁）

心地よき球うつ音す小春日の日影さやかに我が頬に照る（工藤信江 橄 16 35 頁）
秋たちぬ吾や画筆の手をとめて静かに高き夕雲を見る（こほろぎ 萩 2 59 頁）
タされば宿舎の窓にたゞ独りおち葉かぞへつゝ歌思ふ我（野ざく女 同 60 頁）
ローレライ口すさみつゝ佇めばそこはかたなくくれそめにけり（S 子 橄 1 58 頁）
トランプの獨り占ひにもやゝ倦みてハートの A をぞつと凝視（みつむ）る（渡邊智慧子 橄 8 64 頁）

もくれんの散りこし花の一ひらの香をなつかしみ本にはさみぬ（佐藤みわ子 橄 14 84 頁）

はてしなき心の幸を夢みつゝクローバさがすあはれ乙女子（佐藤てる子 橄 16 26 頁）³

静かにも澄める朝かな木犀のかほり流るゝ窓の髪梳く（黒蝶女 橄 21 13 頁）

素直な想いにクスリとさせられる作品もある。英子の歌は、誰しも身に覚えがある。瑛子の歌は、おそらく友人と喧嘩したか教師に叱られ、むくれていた時の体験なのであろう。

元日の初日の光身に浴びて今年こそはと力む我かな（英子 橄 9 121 頁）
人間というものはかくもやさしきかとひよつとおどろき面あげてみぬ（瑛子 橄 2 46 頁）

³ 実際に四つ葉のクローバーを生徒たちが探している様子を描いた文章が、『橄欖』第 1 号に登場する。「運動部報告」『橄欖』1 号（1921 年）、65 頁。

【友情】

学校生活において不可欠な要素が、喜びも悲しみも分かち合える友人の存在である。

撫子の露美しき朝の野を素足うれしみ君とゆくかな（虞美人草 萩 2 59 頁）

わが祈禱り友かなやみを癒すべき力あらじか神よと泣きぬ（白鳩 萩 2 57 頁）

しろがねの水の中よりいづる月めで、笛吹く友とわが身と（ゆき子 萩 4 37 頁）

笑ふこと少なくなりし我故に友ももだして春の山行く（丘 橄 4 13 頁）

学校に一人淋しく急ぐ時道に逢ひたる友そうれしき（江子 橄 9 120 頁）

ソプラノで我のうたへば我が友はアルトで和する若草の野辺（丹野静子 橄 14 83 頁）

去年の夏友と遊びし砂浜の真白き貝もなつかしきかな（工藤信枝 橄 16 35 頁）

まなびやに三年のひまにむすぼれし友のなさをとはにおぼへん（及川トキコ 橄 10 138 頁）

この時期の少女小説等でしばしば描かれるのが、「エス」と呼ばれる生徒同士の友情である。「エス」は Sister の略であり、先輩生徒が後輩生徒と姉妹のような親しい関係となり、愛情の絆を深めることを指す⁴。『橄欖』第 5 号には、「江須愛」（「エス愛」の意であろう）なるペンネームを掲げた生徒が、親密な友情を詠んだ歌を投じている。

何ごとも言はずある時更によしたゞに瞳を見詰め笑めるも（江須愛 橄 5 21 頁）

はしたなき女ぞ我は君見れば胸によらずば慰まぬかな（同）

来む春をこよなく待つも君と我夜のまち歩む別れむ前の日（同）

珍しいのは、失恋をした友に向き合う悩みを詠んだ S（これも「エス」を暗示するのか、単なるイニシアルであるのかは定かでない）による一連の歌である。現実の恋愛沙汰を描いた作品を誌上で公にすることは考え難いため、想像上の光景を描いた歌なのであるが、実際にこのような体験をした生徒もいたことであろう。そのためか、ドラマの一場面のように真実味がある内容となっている。

失なひし戀を悲しむ友どちと河原に立ちて言葉もあらず（S 橄 10 137 頁）

あきらめてただあきらめて生きんなど友の語るにわれはもだしぬ（同）

⁴ 「エス」のイメージについては下記に詳しい。今田絵里香『「少女」の社会史』（頸草書房、4 刷、2008 年）、204-223 頁；稲垣恭子『女学校と女学生－教養・たしなみ・モダン文化』（中央公論新社、2007 年）、94-114 頁。

恋さへもすて、嫁ぐといふ友の言葉かなしも河原に立ちて（同）
何事もみこゝろのまゝよ何事もなど云ふ我のくちびるさむし（同）

不在の友を想う歌は数多い。故郷に残して来た旧友、転居して学舎を去った親友は無論のこと、夏季休暇中の別離であっても友が懐かしく思われることに変わりはない。しばしば、友に手紙を書く場面や来信を待ち侘びる場面が描かれることになる。

事とはん空かけり来るかりがねよあづまの友はつゝがなくてや（野ざく女 萩 2 60 頁）

またしても夢にあこがれ去り行きし友なつかしき灯ともしの頃（宵待草 榎 9 119 頁）

とも／＼にあゆみし道を一人ゆき名もなき花に君をしのびつ（千葉綾子 榎 10 141 頁）

秋の宵窓をひらけば菊の香の胸にせまりて友の戀しき（某生 榎 13 81 頁）
停車場に友を送りし思い出のいとも淋しき五月雨降るも（佐藤光子 榎 14 81 頁）
春の日に野辺に立いでしみ／＼と遠く離れし友思ふかな（熊谷とし子 同 83 頁）
書き終へし友への便りだきしめて外にいづれば夜風身にしむ（佐々木節子 同 81 頁）

一枚の葉書の裏にその友の笑ふ顔さへ見ゆる心地す（ゆり子 榎 9 120 頁）
淋しさに古き手箱を取り出せば恋しき友の細き筆あと（きみ子 同 120 頁）
故郷の友の便りの封切ればほのかに磯のかほり漂ふ（S 榎 14 69 頁）
いかにせむ今日も今日とて待ち侘びし友の便のいつか来べきぞ（工藤信枝 榎 16 35 頁）

すれ違いや仲違いは友人関係においては付き物であり、トラブルを詠んだ歌も度々見受けられる。

もうこれから口をきかじと思ふ日に馬鹿にやさしく見ゆる友哉（瑛子 榎 2 46 頁）
性故と思へど友の雑言を強く気にして涙する我れ（道子 榎 10 140 頁）
いさかいし後のしじまの寂しさよ夜空あふげば星一つとぶ（H・U 榎 10 140 頁）
良き友と仲互ひせし今頃はその淋しさに歌うたうなり（美秋 榎 11 96 頁）
けんかしたあとの寂しさ唯独り路の石ころけりつゝ帰る（戸田春子 同 96 頁）
思ふこと云はず語らずまさびしく別れし友のこのかなしさよ（同 97 頁）
たはむれのすぎて友をば泣かしたる後の心の深くさびしき（鶉橋かつえ 榎 14 81 頁）

我ならばかくはいはしと思ひつゝ、友の語るをきゝて居るかも（小島弘子 橄 16 25 頁）

吾を誣ふる言葉を聴けり穿てりと肯かれるが憎しと思ふ（和泉幸子 橄 21 22 頁）
人は只恨み悲しみ憤り斯くてぞ日々は過ぎ往くものか（同）

友の変化に寂しさをおぼえるものもある。そよ子の歌は、東京に行った友と再会した際の印象を詠んだのであろう。

ゆくりなく一とせ振りに相見れば君は都の少女なりけり（そよ子 萩 4 37 頁）
久々のともに逢ひてのよろこびに我ゑみたれど友は笑はず（加藤清子 橄 14 83 頁）

出会いと別離を繰り返すことに倦み疲れた声も見られる。

会ふものは別るゝものと定まれる人の世の掬うらめしきかな（俊 橄 8 134 頁）

心を許せる真の親友がいないことを嘆く歌も登場する。女学校を舞台にした少女小説がこぞって友情のうるわしさを称揚していた分、そのような体験を出来ずにいた生徒はプレッシャーを感じていたことであろう。

打ちとくる友持たぬ身のしみぐと淋しさしむる此の頃のわれ（H・U 橄 10 140 頁）
語るべき友ゐなければ青空を仰ぎてひとりおくれ毛をかむ（工藤信枝 橄 16 35 頁）

友情にどの程度理想を求めてよいものなのか。古山すみ江が書いた「日誌の中より」の末尾に付けられた議論（『橄欖』2号収録）には、彼女たちの相反する本音が現れている。

A「私は浮薄な友は必要ない、どうして友を信じて自分のすべてを語ることが出来やうか自分自身さへ分らないものが人の心を知ると云ふのは間違つて居る友を知ろうと思ふ前に自分自身を知らなければならぬ」

B「私にはそれが出来ません、余りに淋し過ぎます孤独の生活私には考へたくありません友に裏切られてどんなに苦しんでも私は友が欲しい」（橄 2 38 頁）

【煩悶の情】

上記のような交友関係の悩みとは別に、特定の原因も無く寂しさをおぼえて悩むこと、劣等感や孤独感に苦しむことも青春時代の一部である。やり場の無い煩悶の情を手早く表現するには三十一文字は格好の表現手段であり、こうした憂愁を詠んだ作品は多い。殊に、自らの「若き愁」を白く光る夕顔に比した「虞美人草」の一首は、なかなか情緒がある。

夕顔やほのかに白うわが若き愁にも似てうす闇に咲く（虞美人草 萩 2 59 頁）

かなしみの鳥はひまなくわが胸をやどり木として啼きぬ世は春（木蓮 同 58 頁）

よもすがらねむりもやらずねやの中に物思ふころを落栗の音きく（野ざく女 同 60 頁）

思はじと文を読めども束の間も灰色の憂我を離れず（柳野葉子 橄 5 22 頁）

いたづらに成すこともなく去りて行く年を思へば涙ぐましも（加藤きよ 橄 7 56 頁）

悲しさにつと窓の辺に立よればかすかに揺る、紫陽花のはな（橘川静江 橄 8 66 頁）

憂愁にうちとざされし吾が胸のくらきにも似て迫る薄闇（W 橄 8 64 頁）

もの皆は幸の多くみえて唯一人うなだれて歩む正月の夜（同 64 頁）

何がなく口とくことのいとはれて今日も淋しくほゝゑめぬ（同 65 頁）

耐へかねて人をしのひぬ今更に乙女心のはかなさを知る（千葉綾子 橄 10 141 頁）

つかれたりあこがれもなく夢もなき深き眠りを我にあたへよ（美秋 橄 11 95 頁）

小夜時雨窓にうつ音の寂しさよ我が身我胸知る人もなく（戸田春子 同 97 頁）

寂しさに河原に行きて慰めに砂一面に字をかきにけり（新妻勝子 橄 14 83 頁）

ひねもすを風吹き荒れて散り敷ける病葉のごと落莫たる心（和泉幸子 橄 21 22 頁）

童心を失いつつある自らを悲しむ歌も見られる。そよ子の歌では、変わりつつある自分の心とのコントラストとして、記憶の中で変わらずにいる幼馴染の友人を考えているのであろう。

一とせは一とせ毎に荒み行く胸になつかし幼な友達（そよ子 萩 4 37 頁）

あまりにも孝の心の消え果てて悲しく思ふ今頃の我（美秋 橄 11 95 頁）

何か衝撃的なことがあったのか、絶望の悲しみを書き連ねた作品も見られる。心の鬱のために朝起き上がることもできない若者がいることは、今日も変わらない。

生きの〔る？〕身の望なければ朝の日かがやき照れど起きたくもなく（くちなし 橄 8 61 頁）

吾胸は涙のうつぼ其涙こぼさじと今日もたへてたへたる（同）

幸福はつひに来たらずと云ひつゝも尚心秘かに待つ哀れさよ（渡邊智慧子 同 64 頁）

自身の心や社会の姿に偽りを感じ、嫌悪感をおぼえることもある。下の3首目の歌は、明らかに与謝野晶子の「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」を意識している。学校で語られる高尚な道徳論と現実社会の実態との乖離に疑問をおぼえたのであろうか。

底知れぬ偽に染み底知れぬ我をも知らで人の道ゆく（菊地つね子 橄7 55頁）

悲しきは偽に泣く我心偽りてゆく人のすがたよ（同）

人の世の矛盾になきて人の世に道を説く人悲しからずや（同）

自らの姿に疑問を抱き、弱さを嘆く歌も存在する。

唯清く生きんとするは何故ぞ涙ぐましき此の頃の我（ゆり子 橄6 26頁）

いささかの事に涙す弱き我強くなりたし強くなりたし（工藤信枝 橄16 34頁）

泣くまじと唇かめど湧き上るこの胸ぬちの憤りかも（同 35頁）

上の3首を読んで思い出されるのが、『橄欖』第1号に掲載された聖書科2年生のT子による「断片集」の言葉である。聖書と対峙して内面を省みる聖書科生ならではの葛藤と見ることもできるが、心情としては上の歌の筆者と相通ずるように思える。今日も同様の想いを抱いている若者は少なくないであろう。

「自分はほんとうに仕様のない人間だと愛憎（想）がつきる。貧しいと思ふ。無能だと思ふ。ぶちたくなる。ふみにちりたくなる。けれどこんな小さな力で。こんな貧しい力で。人なみに『生きたい！』ともだえて、あがえ【い】てゐる事を思ふとそのいぢらしさに、泣かずに居られなくなる。」

「胡魔化す事はいけない事だ。胡魔化す事は恐ろしい事であると思ふ。けれどもしも胡魔化さなかつたら生きて行けない弱い事をどうしやう。」（橄1 37頁）

しかし、こうした心の淋しさは、人と人をつなぐものになることもある。T子是这样書く。

「人の心の淋しさを見る時。冷たさを見る時。悲しい程の人間性の善良さと弱さを見る時。真実の自分の姿をはつきりと見る事が出来る。神の光を感じる事が出来る。その時に私は淋しいんだ。淋しいんだみんなが淋しいんだと涙ぐまずに居られない事を感じる。」

（同 38頁）

【望郷の念】

孤独感が増す一つの要因は、故郷が慕われることであった。年若く肉親から離れて寮生活をする身では、学業や交友関係で困難にぶつかるたびに望郷の念が募ったであろう。実家への想いを綴った文章は誌上に時折登場する。「あゝ、私は故里が懐かしくてたまらない。故里を眺めてはおもはず涙にかきくれ【る】のであります。私の家はあの奥羽山脈の蔭にあるのです。心のさゝやきは、始終『あの山越えてあの山越えて』といつて居ります。」

（齋藤きよ子 橄1 18頁） 当然ながら、こうした慕情は歌にもしばしば詠まれることとなる。

しもやけのいたさに一人ねむられず只故郷の夜を思へり（篤子 橄9 120頁）
舎の窓にもたれておれば何となう里の夕暮れ思ひ出さるゝ（美秋 橄11 96頁）
故里を遠くしのびつ文机にむかひてあれば母の面見ゆ（某生 橄13 81頁）
何時しかに暮れ行く空を眺めつつ遠き故郷しみじみ想ふ（S 橄14 68-69頁）
なつかしき故郷よりの小包に糸とく暇ももどかしきかな（同 69頁）
故郷の友の便りの封切ればほのかに磯のかほり漂ふ（同）

思わぬところで故郷の母の愛情を思い出すこともある。「母の日」に学校で配られたカーネーションである。

母の日に紅のカーネーションを胸にさし母健やかにとはるかに祈る（水濱 [みきわ] 橄14 73頁）

たらちねの子を思ふ心をしのびつゝ夜毎の月に母をぞしたふ（同）

【死者を偲ぶ】

懐かしむものは故郷だけでなく、亡き肉親や友人のことも含まれる。身近な死者を偲ぶ歌は相当数を占める。実際に在学中に親兄弟を喪った人は少なくなかったであろうし、1932（昭和7）年1月に奈良で発生した電車・バスの衝突事故に巻き込まれて死亡した伊東文子（英文科3年生）のように、生徒が急逝することもあった⁵。収録されている文章の中にも、友の死に驚かされた体験を記した手記や追悼文、弟の死に寄せた詩文なども見られる⁶。死が日常の近くに存在していたことが感じられる。

何となくただなんとなく物悲しちゝ失なひし我身の秋は（野ざく女 萩2 60頁）
いたつきの枕に寂し秋雨や逝きにし友のさゝやきに似て（しづ江 萩4 37頁）
去年の秋喜び迎へし師の君のはや在さぬがいとうら悲し（橄野葉子 橄5 22頁）
ぬば玉の黒きとばりにまたゝける星見る度に母ぞしのばる（ゆり子 橄6 26頁）
花散ればちゞにくだくる我胸は亡き母上やなつかしみてん（加藤きよ 橄7 56頁）
去年の春思へば悲し亡き友の遊びてありし時にぞあれば（同 57頁）
さめてなほ母の面影しのびつゝまくらつめたき明け方の空（菊子 橄9 119頁）
母さんと呼はんとすれば姿なく唯残れるは涙のみなり（百合子 橄9 122頁）

⁵ 「伊東文子さんを弔ふ」『橄欖』11号（1932年）、99-107頁。

⁶ 例を挙げれば： 及川みつ「思ひ出の記」『萩の下露』4号（1914年）、16-17頁；美繪子「思ひ出と別れ」『橄欖』2号（1922年）、29-31頁；佐伯きん子「逝きし友」『橄欖』3号（1923年）、16-21頁；矢野恵智子「逝きし幸子さん」『橄欖』7号（1927年）、40-43頁；YS「逝ける弟に」『橄欖』7号（1927年）、58-61頁；遠藤緑「或る夜亡き弟を追憶して遠き友に送る」『橄欖』14号（1934年）、79-80頁。

亡き母のかたみとなりしこのはれ着短くなりて我は悲しき（みのり 同 120 頁）
音もなく降る雪の夜の静けさにおもひそ出づる母のおもかげ（英子 同 121 頁）
独楽遊び見る度毎にありし世の小さき弟を思ひだすなり（よしえ 同）
夕まぐれ小暗き空に只一人亡き母上を思ふ我かな（同）
窓越しにふる紛「ママ」雪をながめては永久に去りにし妹思へり（悦子 同 120 頁）
亡き兄の思ひ出なりし矢車の芽ばえ出でしと語る朝かな（S 橄 10 136 頁）
我ために夕餉とゝのふありしは「日？」の母の恵を憶ひ出でて泣く（緑瑤女 橄 10 138 頁）

昇り行く母のみたまを打ち狂ひ狂ひ呼べども詮なかりけり（同）
母といふ名のみ残れる一塊の冷たき石と変りたまひぬ（同）
愛の主に母のみたまをゆだねつゝなほ涙する弱き身を泣く（同）
濱の子が拾ひてくれし貝がらは亡母上の指つめに似て（同 139 頁）
父あらば若し父あらばと思ひつゝ父てふ文字を書くぞわびしき（H・U 同 140 頁）
いまは亡き友のこころを忍びつつこよなく愛でしコスモスを祈「折」る（S 橄 14 68 頁）

ほゝえみの消えぬほのかの面影を迫る夕べにうつしうかべぬ（同）
いつとなく心静まり亡き人を思ふ我かなけふもきのふも（工藤信枝 橄 16 35 頁）
おのがふむ落葉の音のなつかしき夕べの庭に父を偲びつ（志賀恭子 橄 21 24 頁）

死の影がさすこともあるため、身近な人の病には心が重くなる。

せ戸のびわ花咲きたりと云ひし日は君病み初めしその日なりとか（暁星 橄 7 55 頁）

紅の梅散る夕ふるさとながき病の友に逢はんとす（千葉綾子 橄 10 141 頁）
父やみてラヂオもかけずひつそりと淋しきまゝに日は暮れにけり（加藤清子 橄 14 83 頁）

やがて思いは、自らの死のことに至ることもある。

カチ／＼とセコンドのみは絶間なし此の世を去りて何処にぞゆく（ゆり子 橄 6 26 頁）

【信仰と祈り】

キリスト教校として、学校生活の中心に置かれているのが信仰と祈りである。寄せられた論説や随筆の中にも信仰について述べたものがしばしば見られる（批判的な声も含

まれる)。『橄欖』第8号以降は、前年夏に開かれた御殿場での基督女子青年会（YWCA）修養会に参加した生徒たちの手記も掲載されるようになり、会場で学んだ事柄や感想が披露されている。短歌の中にも信仰を扱ったものが少なからず存在する。下記の歌のうち、冒頭のものからはツリーとロウソクを飾った明治末のクリスマス礼拝の様子が見て取れよう。

常盤木の緑に映ゆる聖燭(みあかし)のもとに額伏せ祈禱りする宵（白鳩 萩2 57頁）
星清き夜なり静けき野にたちて神の聖旨（みむね）をたゝへつゝ居ぬ（同）
神の道ゆけどはるけし吾未だ召されぬものかこゝにまどひぬ（同）
二度（ふたび）はそむかじとしも主にちかひてまたも破りて罪に泣く身や（同）
悪くとも悔ひたる時ぞ人の身は貴く光る器にぞある（加藤きよ 橄7 57頁）
苦しみの時のみたよる弱き身を投げすてまほしほろびの国へ（同）
雲よいざ雨よふれ／＼風も吹け我はひたすら天を仰がん（橘川静枝 橄8 65頁）
新しく尊き神に祈らまし雪つむ松に初日にほひて（同 65頁）
美しき星の光を身に浴びて今宵も静かに一人祈りぬ（T 同 67頁）
ほがらかに鳴く鳥の声きこゆなり神のめぐみの朝のきたれば（同）
一日のつとめをおへて祈る時神のめぐみのせまり来るなり（戸田春子 橄11 97頁）
信ぜじと口には言ひつ祈らではやまれぬ心悲しかりけり（同）

『橄欖』9号には、大病から回復したのか、試練の意味と自らの前途について思いめぐらす聖書科3年生の歌が7首掲載されている。

数多き数の中より数ならぬわれを選びし神の尊さ（千登世 橄9 115頁）
いかなればかよわきものを試むる慈愛の父の心知らず（同）
いとし子を愛すればこそ鞭うたむ聖き怒りはわれをつゝみぬ（同）
みむねなら苦き杯うけまほし君に従ふわれなればこそ（同）
宮城野に棄つるいのちは惜しからずただゆく道を照らせわが神（同）
癒されて学びの道にたちかえり心ゆくまで聖書に親しむ（同）
土くれにひとしき身をも棄てまさでとり上げ給ふ神のみめぐみ（同）

続くページに「死よ汝はいづくに在りや」と題して掲載されている一連の歌は、信仰告白をして洗礼を受けた生徒の作品のようにも見受けられるが、背景は定かではない。

あゝ吾れはうれしきかな主はじめてぞ君を喜ぶ吾れとはなりし（津多枝 橄9 116頁）

くろ土に萌え出し身のうれしきか吾れも同じぞ新しき身ぞ（同 117 頁）
天地はくしくもあるか宇津し身をあはせ給へりみ手のわざなれや（同）
あゝただ主許させ給へ吾が心みづからにのみ誘はれ来し（同）
今日のこのひと日を君に捧ぐこそ生けるいのちに如何にとほとき（同）
うれしきは此の天地を歩み来て君を見い出て吾れ慕ふこと（同）

『橄欖』13 号に掲載されている聖書科生徒（某生）による 4 首の歌は、そのまま讃美歌になりそうである。

ぬばたまの、やみにさまよふ、羊らよ 心して見よ、「光」！輝く。（橄 13 81 頁）
行く道は、一筋なれど、弱きため 闇路に迷ふ、此の頃の我（同）
うき事のすべてをイエスの十字架に まかせてたどらん、主の正道を（同）
ひたすらに、祈る心の静けさに 一日の罪もゆるさるゝ心地す（同）

『橄欖』14 号には、父を喪った T 子が郷里から仙台に戻る列車の中で詠んだ 14 首の歌（「父みまかりて」1933 年 5 月 9 日付）が載せられている。苦しみに向き合いつつも、神の導きに信頼を置いて歩み続ける堅固な信仰を表明するものとなっている。

野をも越え山をも越えて走り行く車窓にもたれ物思ふかな（橄 14 58 頁）
人生に死と云ふ影の厳然と地をば圧して立つを覚ゆる（同）
緑萌ゆ自然の姿眺むれど父亡き子にはいとど淋しき（同）
ハラ／＼と散り行く花の影を追ふ私の眼ぞ何時かうるみぬ（同）
都さし帰り行く身に幸ぞ待て父亡き子には凡て悲しき（同）
母上よあまりに早やく訪づれし「ママ」悲しみ背負ひ歩み給ふか（同）
我が行手如何になるかは闇なれど神に託さん只信じつつ（同）
波よ立て嵐よ吼えよ恐れまじ死の影目指し我は進まん（同）
骨肉の情こそいとど尊とけれ我育くまん聖く正しく（同）
厳肅なる人生の岐路に物思ふ心ぞ永久に我のかたみそ（同）
終で耐え忍ぶ者は救はると宣ひし主を只信じ行く（同）
悩みをば背負ひつつ只に進み行く人の姿ぞ実に尊とけれ（同）
張りつめし心もややに弱り行く日も傾ぶける車内の一隅（同 59 頁）
何事も忘れつ只に励まん光り輝く港目指して（同）

続く頁に T 子は思索を書き連ねた後、4 つの歌を書き添えている。

弱まれる我が身と魂をみな捧げ我は行きなん十字架の道（楳 14 60 頁）
幾度か逃れんとする心強まれど尚止め給う神の御愛（同）
萌え出づる若芽ぞほのかに匂ふなれ寒さ〔き？〕冬にも春は迫りぬ（同）
人生とは激しき戦ひの営みぞ今日も歩まん光望つ（同）

【明るい日常】

とはいえ、生徒たちは人生の苦悩や葛藤ばかりを歌に託していたわけではない。屈託の無い日常、家族との胸あたたまる時間を描いた作品も見られる。

たのしげにひいふうみとお正月よび出たさるゝ羽子の音かな（節子 楳 9 121 頁）
尾をふりて我があとさきを馳けめくる犬もうれしき朝の草原（三枝 同）
我が張りし障子の手きはよく目立ち光まふしき冬の朝かな（ゆり子 同 120 頁）
なつかしき友のたまへる小さき壺花さしかへて一人ほゝゑむ（とし子 同 119 頁）
雪女来るよと母にすかさし幼き時のなつかしきなか〔ママ〕（節子 同 121 頁）
叱られてなく／＼丘に来て見れば飛び立つ雁もあはれにそ見ゆ（とよ子 同）
梅の花画がきてありし茶碗をば求めかへりて心たのしき（S 楳 10 137 頁）
すぎし日の良きも悪きも忘れよと寒空遠く除夜の鐘なる（H・U 楳 10 140 頁）
すや／＼とねむりについた弟はかはいゝ顔ではゝゑんでゐるよ（岩佐清子 楳 14 83 頁）

初めての歌の言葉のむつかしさ指折るのみに時はすぎ行く（伊藤京子 楳 14 82 頁）
けんくわして己れわるしと知りつゝも横目ににらむ妹のかほ（同）
まなびやに通ふ妹の足どりも喜びに満てり春日をうけて（馬場年子 同 84 頁）
はてしなく遠きみ空の七つ星今宵はことに仲よくも見ゆ（山田たい子 同）
自動車の立てし埃によごれたる庭の草木を父と洗ひぬ（小島弘子 楳 16 25 頁）
指折りて羞づかに微笑めり頬あかきをとめに我もなりにけるかな（和泉幸子 楳 19 67 頁）

沈々と秋はなつかし爐の端に母と対ひて栗を焼くなり（同）

【社会への反応】

『萩の下露』『橄欖』刊行の時期は、大正デモクラシー、女性参政権運動、関東大震災、東北凶作、満州事変等、緊張が高まりつつある時であった。しかしながら、概して社会の事象に対する関心は生徒たちの文章の中では強くない。このためか、短歌においても実社会の事柄に触れているものはほとんど登場しない。

1937（昭和 12）年 6 月 30 日、ヘレン・ケラーが仙台を訪れ、宮城女学校の生徒 150 名が仙台駅まで歓迎に赴いている。この日の夕と翌日に市公会堂で開かれた講演会には、専

攻部・高女部の生徒たちも出席した⁷。このイベントに対する在学生の反応は『橄欖』には登場しないが、同窓生（25期）の池田ふみが詠んだ4首の歌が『橄欖』19号に掲載されている。池田は、視覚障害を持つ友人と共にヘレンの講演会に出席していた。いささか表面的な内容ではあるが、ヘレンの生気に満ちた態度と独特の話しぶりが印象に残ったことが読み取れる。

盲聾啞の三苦を負へる人といふヘレンケーラーの面(おも)かがやかし（橄19 44頁）
さき [い] はひは感覚にのみ得られずとヘレンケーラーは壇上に叫びぬ（同）
三重苦を負ひつつも語るヘレンケーラーの奇しき声音に胸をつかれつ（同）
かたはらにそひて聞き入る盲目の友の涙をはじめて見たり（同 45頁）

『橄欖』21号には、日中戦争の戦況について触れた「黒蝶女」の歌が掲載されている。ラジオニュースに耳を傾け、軍事郵便を読む銃後の生活が描かれているが、敵味方を問わずに人命の喪失を悲しむ姿勢が救いとなっている。なお、「黒蝶女」は同じ号に、中国戦線に赴く途中に実家に宿泊した5人の兵士との交流体験を述べた文章を寄せており、その内容はこれらの歌とセットになっている⁸。

アナウンサーの声たかぶれり我もまた息つめて聞く戦況ニュース（橄21 13頁）
幾万の妻が母等が心凝らし今ニュース聞く姿しのばゆ（同）
敵味方いづれ問はなく今はたゞ人の命のかなしかりけり（同）
敵前三百五十米の濠の内月明かりにて書きしてふたより（同）
月を経て届けたより今にしておこせる人に恙有りや無しや（同）

同じ号に掲載されているこの歌も、出征した兵士の無事を祈るものであろう。場所は大崎八幡宮であろうか。

遠き子を守れと祈る垂乳根の柏手響く八幡の森（大竹利意子 橄21 24頁）

そのすぐ隣にこの歌が掲載されているのは、前途に立ち込める暗雲を漠然と感じているようにも見える。

⁷ 「六月三十日 ヘレン、ケーラー博士一行零時三十九分仙台駅着のため本校高女部三年生以下百五十名尚綱高女生と共に駅に歓迎す。専攻部生徒午後七時半公会堂に於ける講演を聴聞す。 七月一日 午後二時高女部四、五年生生徒大越先生引卒[ママ]の下に公会堂に於けるケーラー博士の講演聴聞す。」「『橄欖』19号（1937年）、126頁。

⁸ 黒蝶女「兵隊さんと達磨さん」『橄欖』21号（1940年）、13-16頁

吹く風の心のまゝに寄せて散る人の運命の悲しかりけり（和泉幸子 同）

【幻想と恋】

作品の中には、幻想の戯れから生まれたような歌も見られる。下に挙げた歌からは大正浪漫の絵、小川未明の短編などを思い起こす人もあろう。いささか芝居がかった加藤きよの「小箱の秘密」は、思わせぶりのイメージを醸し出したい作者の意図が丸出しで微笑ましい。鶉橋かつえは実際に断髪したのかも知れないが、モダン風のショートヘアにするためだったのではないだろうか。しかし、このように歌に詠まれると物語の一場面のように見える。

我が心紫色の衣きて春日のもとに大らかに舞ふ（Y子 橄2 45頁）

眠るごと否(また)平安を捧るごと城の上にたつあやしきかたち（江須愛 橄5 21頁）

謎秘めて幾千年かスフィンクスもだせるごとく我もしかなすや（同）

解けも得ぬ小箱の秘密だきしめてうなだれ勝ちのこの頃の我（加藤きよ 橄7 56頁）

散りて行くダリヤの花へ口づけぬ泪ぐましきある日の我（同）

ほのかなる我が思ひにもまさりたる月を生命の宵待ちの草（宵町草 橄9 118頁）

やみをのみ生命と咲きたまゆりの寂しき花を許しませ君（千葉綾子 橄10 141頁）

あげ舟によりて唱へるセレナーデ淋しき節に波はかなでり（緑瑤女 橄10 139頁）

一人来てはまなでしこを手折らんと松原ごしに夕汐を聞く（同）

たちきりしこの黒髪のスてかたく紙に包みてしまふ我かな（鶉橋かつえ 橄14 81頁）

時として恋歌のように読める作品も登場する。無論、これらは実在する異性の想い人を詠んだものとは限らない。「エス」に対する思慕の表現かも知れないが、生徒たちの憧れを描いた創作と見ることもできよう。

書いて消し消してはかきぬ君が名をあはれ消え行く真白き砂に（野菊 橄4 13頁）

君に似し人にあひたり晩秋の灯のちまたよひやみの頃（俊 橄8 134頁）

ねもやらで落葉の音をきく夜はただ一すぢに君ぞなつかし（同 135頁）

うつり行く君が心を止め得ず君かうつしゑ淋しく眺む（W 同 64頁）

人の世のなべての律法如何にもあれ我は行かなん君が御胸に（同 65頁）

かすかなる落ち葉の音にまとはされ君かと思いいくたびか立つ（宵待草 橄9 118頁）

【結び】

以上見て来た作品以外にも、相当数の歌が『萩の下露』『橄欖』には掲載されている。四季折々の風景を詠んだものや年賀の祝歌等もあるが、ここでは紹介することができなかった。いずれも生徒たちの文芸創作の豊かさを覗かせてくれるものである。こうした作品は、オリジナリティや技巧という面では決して優れたものとは言い難いかも知れないが、公的な学校資料からうかがい知ることが出来ない女学生たちの内面世界や美意識を映した貴重な史料であり、他校の文芸雑誌中の作品と比較することができれば興味深い発見が期待できよう。今後は、生徒の手になる随筆や童謡などについても紹介して行きたい。

最後に、『橄欖』12号に掲載された高女部5年生（ペンネーム「すづめ」）が卒業時に残したメッセージの抜粋と、『橄欖』7号に掲載された「AT」の歌一首をもって本稿を閉じたい。制約が多い中でも精一杯生きて来た生徒たちの熱気が伝わって来るようである。

学生時代ーそれはぴちぴちはねかへる飛び魚のやうに元気な、そしてピンクのカーテンで包まれて空間に絵をかくやうな朗らかな時代だ。喧嘩もよくする。先生にもお説教をよく承はる。目上の人から叱られるのは常習だ。それだけ又可愛がられるのも学生時代の徳だけれども。（略）

冷たい世間が何んだ。我等は飛び魚だ若い力で精一杯働いて彼処に生きる力を見出すんだ。それが学生生活で習った立派な結晶ぢやないか。何時も希望をもち現在に生きるのが学生の本分ぢやないだらうか。（すづめ「巣立ち行く」 橄 12 70 頁）

あらたなる希望の花を胸に秘め勇みて進まんひとのまさみち （AT 橄 7 56 頁）



『橄欖』第1号～第21号における書誌および目次一覧

資料室 佐藤 亜紀

『橄欖』が発行された大正期は本校にとって、専攻科の充実、第二校舎の献堂、さらには生徒たちによる自主的な「文学会」や「基督教女子青年会」といった教科外活動が盛んになり、まさに宮城女学校の発展期でありました。『天にみ栄え』によれば、明治期を本校の「創建期」、いわばかたちが整えられた時期とするなら、大正期はなかみの充実が図られた時期であり、それはまた、第六代校長 A・K・ファウストの在任期とほぼ重なります。その後、昭和期となり、日本は「満州事変」、「日中戦争」、やがて「太平洋戦争」へと突入していくなか、第七代校長 C・D・クリーテの在任期は、本校にとって試練の幕開けでもありました。第1号が発行された1921（大正10）年から最終号の1940（昭和15）年までの19年間に発行された『橄欖』は、時代の転換期における学校生活の記録でもあり、生徒たちの文芸作品を通してこの時代の彼女たちを感じ取ることができる、貴重な資料です。

この度、資料室では『橄欖』第1号～第21号における書誌および目次一覧を掲載することとしました。目次を見てみますと、生徒たちの創作作品、教科外活動報告、校報欄、同窓会欄など多岐にわたります。この目次一覧が、本学の歩んできた歴史を今後さらに深める手掛かりとなりましたなら幸いです。

凡例

1. 漢字は、人名などの固有名詞をのぞいて旧字体を新字体に改めたところも一部ある。
2. 仮名遣い・送り仮名は原則として原文に従った。
3. 学年表記は、原文のままとした。
4. 読みやすさを考慮し、目次に番号や・を付け加えた。

¹ 『橄欖』は、その後、1940（昭和15）年5月15日第1号より、毎月発行・見開きB4版4頁を原則とするタブロイド版として発行される。1944（昭和19）年3月25日第23号をもって、廃刊となるが、1952（昭和27）年に宮城学院高等学校の自治会誌として復刊となる。

1. 書誌

	号数	出版年	発行月	総頁数	発行者	印刷所	備考
橄欖	1	1921(大正10)	6	68	宮城女学校文学会	東北印刷株式会社	
橄欖	2	1922(大正11)	4	56	宮城女学校文学会	労働会金子記念印刷所	
橄欖	3	1923(大正12)	6	61	宮城女学校文学会	労働会印刷所	
橄欖	4	1924(大正13)	6	41	宮城女学校文学会	松華堂 水野印刷所	
橄欖	5	1925(大正14)	11	38	宮城女学校文学会	東北印刷株式会社	
橄欖	6	1926(大正15)	12	128	宮城女学校文学会	東北印刷株式会社	
橄欖	7	1927(昭和2)	12	79	宮城女学校文学会	東北印刷株式会社	
橄欖	8	1929(昭和4)	3	152	宮城女学校校友会	労働会印刷所	
橄欖	9	1930(昭和5)	3	230	宮城女学校校友会	労働会印刷所	
橄欖	10	1931(昭和6)	4	215	宮城女学校校友会	労働会印刷所	
橄欖	11	1932(昭和7)	3	187	宮城女学校校友会	労働会印刷所	
橄欖	12	1933(昭和8)	3	177	宮城女学校校友会	水野印刷所	広告あり(佐々重、ビクターコロムビアレコード、フランク・スパン 常食改善会) 中表紙に、「宮城女学校校友会・宮城女学校同窓会」と連名で記載有(12号～21号)
橄欖	13	1933(昭和8)	12	150	宮城女学校校友会	水野印刷所	
橄欖	14	1934(昭和9)	6	113			奥付なし
橄欖	15	1934(昭和9)	12	132	宮城女学校校友会	水野印刷所	本編98頁+同窓会員名簿34頁
橄欖	16	1935(昭和10)	6	79			奥付なし
橄欖	17	1936(昭和11)	2	71	宮城女学校校友会	水野印刷所	
橄欖	18	欠号					
橄欖	19	1937(昭和12)	12	177	宮城女学校校友会	水野印刷所	
橄欖	20	1938(昭和13)	12	72			奥付なし
橄欖	21	1940(昭和15)	3	60	宮城女学校校友会	水野印刷所	

2. 目次(記事)一覧

号数	年	目次(記事)	執筆者
橄欖 1号	1921年	1. コロタイプ写真版(校舎全景、第二校舎) 2. 橄欖に題して 3. 巻頭の辞 4. 橄欖の発刊によせて 5. 論説 ・きまりきった話 6. 英文 ・The Object of the Rainbow Club of the Y.W.C.A ・If I Were an Elf 7. 文苑 ・卒業にのぞんで(五年の作) ・遠足 ・故里戀し ・雪の朝(一年の作) ・冬の朝(一年の作) ・我が家(一年の作) ・路上の氷(二年の作) ・我が学校(二年の作) ・私は黒板である ・平和な初春(三年の作) ・夕暮れ(三年の作) ・新緑 ・私とTさん(三年の作) ・断想 ・光 ・旅行先から(五年の作) ・昔のページより ・光 ・若葉の下に立ちて ・初夏のエンゼル ・断片集 ・影を追ふて ・三つ葉 8. 新体詩 ・「聖クララを想ひて。」 ・カラツ風が吹く ・灰色の日 ・星と山茶花 ・豊平川のほとりにて ・風の夜 9. 和歌(十首) 10. 校内の今日此頃 イ)英語会記事 ロ)音楽クラブ記事 ハ)女子青年会記事 二)文学会報告	土井晩翠 会長 ダクター・ファウスト 雑誌部長 小野玉枝 高女五年 田中ちゑ 英専三 阿部エイ 高女五年 片桐きよ 卒業生 小館赤子 一年 大越やえ子 一年 齋藤きよ子 二年 土井 信 二年 佐久間富貴子 二年 大槻邦子 三年 根本和子 三年 澤口勝子 三年 遠藤クマ子 四年 佐久間百合子 四年 齋藤てる 四年 土井 照 四年 F子 青 銀 五年 菊地ふみ子 卒業生 くれなゐ 英専一 細谷えん 英専一 渡邊三千代 家政一 鈴木千代 I・M 聖専二 T子 家専二 T子 聖専一 T子 瑠璃草 青井空子 H女 高女二年 高橋はな子 遠藤玖磨子 鈴木富壽代

号数	年	目次(記事)	執筆者
第2号	1922年	1. コロタイプ写真版(大正10年度文学大会「劇」 クリスマスキャロー心の家) 2. 成田榮嬢を悼みて 3. 本会のためファウスト会長の選ばれし「詩篇」の一節 4. 「自ら培へ」 5. 英文 (1) Resolved that Marquis Okuma was A Greater Statesman than Prince Yamagata a. The affirmative b. The negative (2) Writing is a Joy 6. 論説 ・ベツレヘムの星 7. 文苑 ・人魚 ・初春の風 ・日誌の一節 ・小さな芽生 ・春あさく ・小さい私の十字架 ・思ひ出と別れ ・弟 ・暮れゆく年 ・すみれ咲く日 ・小さな感謝 ・お床・藪甘子・水車小舎 ・真白い蛾 ・雪 ・日誌の中より ・ひとりごと ・凝視 8. 和歌 ・よるの海 ・淋しさ ・マリヤの像を求めて ・皆様の御好な御花は？ 9. 記事 ・青年会記事 ・文学会報告 10. 雑報 ・謝恩会 ・卒業式	土井晩翠 小野玉枝 英三 條 フミエ 英三 阿部エイ 五年 田中ちゑ 聖二 増子わくり 一年 大越やえ 二年 N子 ○子 遠藤 くま 四年 栗村 道 美繪子 五年 K子 K子 紀水子 秋 根本スズ 秋 三年 鈴木富壽代 古山すみ江 星夜 H Y子 三年 鈴木富壽代 瑛子
第3号	1923年	1. コロタイプ写真版(大正11年11月文芸会ドラマ「キングレア」 (同上 「洞窟から来た子」) 2. 牡丹 3. 船を乗り出せ 4. 英文 ・別れにのぞみて 5. 文苑、詩 ・魂の憩ひ	土井晩翠 ホイットマン Catharine L.Nau、Alliene S.Dechant

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・春の雪 ・春風と鈴蘭 ・流れ星 ・猫 ・童謡二題 北斗星 お庭の隅から ・貝がら ・祖母 ・春雨 ・逝きし友 ・亡き友の追憶 ・小さな反逆者のノートから ・その頃 ・魂と魂との別れ ・夕暮れ ・夢 ・春の雨 ・いちわる時計 ・夜汽車 ・さびし ・或夜 ・異端者 ・麗しの異教徒へ ・嵐 ・虫っこ ・詩二編 ・「生くる喜」を實感する人々に ・みだれた足跡 ・小さい頭の素通り ・断想片	中村みち子 渡邊千秋 野の花 S・I くま子 渡邊榮子 佐伯きん子 小野はつゑ T・W S子 佐藤郁子 植村幸枝 遠藤らく子 田鶴子 はつ枝 佐藤郁子 佐藤今子 山本田鶴子 白雪 緋沙湖
第4号	1924年	1. 写真(メーボルダンス、綱引競争) 2. 巻頭言 3. 「詩」チャイルド・ハロウドの巡禮より 4. 生くる我 5. 詩二編 ・春月の下に偲ぶ ・青年へ! ・一 ・二 6. 童謡 ・残った梅の花 ・さくら 7. 小曲 ・三日月 8. 和歌 ・五首 古きノートより ・三首 旅行より ・二首 無題 ・一首 ・一首	委員 土井晩翠譯 郁子 後藤とみ N・Y 渡邊英子 小原京子 丘 丘 野菊 ほほゑみ 星花 萩のつゆ

号数	年	目次(記事)	執筆者
		9. 譯詩 ・ 愛 10. 幽藟の春 11. うすれ行く姿 12. 傀儡師にあやつられた気の毒な人々の話 13. 編輯後記	コレッヂ作 佐藤 今譯 鈴木イサヲ 佐藤 今 鈴木イサヲ 委員
第5号	1925年	1. 輪おどり 2. 「金華山より太平洋を望みて」より 3. 小品 ・ 私のお部屋 ・ 思ひ出 ・ 冬の朝 ・ メートルの歌 4. 戯曲 ・ 月を射るもの(一幕) ・ 荒原の或る夜 5. 詩二篇 ・ 自分に云つてきかせる言葉 ・ センテイメンタル 6. 雲雀へよする 7. 彼女の話 8. 短歌 ・ スフインクス ・ 初秋雑詠 9. 二人の僕 10. 見はてぬ夢 11. 編輯後記	ボオル・フォオル 土井晩翠 一年 佐藤静枝 二年 石田房子 二年 石崎恒子 二年 内島衛子 英三 志村京子 家三 T・K 英二 みどり 英二 度會たか 英二 山本田鶴子 英三 江須 愛 家三 檉野葉子 聖一 饒 英三 鈴木いさを 委員
第6号 宮城女学校 創立第40年 記念号	1926年	1. 創立第40年記念式写真 2. 記念式列席同窓会員写真 3. おもひで 4. 祝辞 親愛なる諸姉 5. 祝辞 創立40年記念式祝辞 6. 祝辞 創立40年記念式祝辞 7. 小品及創作詩 ・ かくれんぼ ・ 秋月 ・ 湯気につつまれて ・ 或愚か者の断片 ・ 山にのぼりて ・ 秋の夕 ・ 夏の海辺に立ちて ・ たまご ・ 赤ちゃん ・ 夏休み日記の一節 ・ 流れ星 ・ クローヴァをもとめて ・ ある夜の夢 ・ 運用丸 ・ 祖母 ・ 和歌	土井晩翠 フアウスト校長 米国リフォームド教会 婦人ミッション会長 ミセス、アンナワルト 宮城県知事 上田萬平 五年 渡邊英子 三年 津久井歌子 K四 佐藤英子 英一 加納トミコ 本科一年 伊藤さつ子 四年 K・K まひる 一年 高橋初恵 高五 奥 あや子 二年 佐藤静枝 四年 S・T 古澤さち子 四年 清水きよえ 四年 遠藤ミチ ゆり子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・秋 ・一隅より ・秋風 ・青梅 ・夢 ・暗い部屋 ・生命 ・秋夜に ・ある人間 ・或日のこと 8. 学校記事 9. 校友会会計報告 10. 女子青年会報告 11. 記念式記事 ・演奏会記事 ・運動会記事(写真入り) ・文学会記事 ・バザー記事(写真入り) 12. 勤続教職員謝恩会記事 13. 同窓会報告 ・東京支部 ・神戸支部 14. カンサス便り 15. 同窓祝辞及消息(写真入り) 16. 同窓住所姓名 17. 教職員住所氏名 18. 英文欄 ・英作文 祝辞 ・クロバの葉かげ 19. 文学大会執行順序 20. 宮城女学校沿革 21. 編輯後記	一年 廣瀬シン 黒桔梗 四年 K・K 五年 W・H 一年 鈴木とし子 聖三 清水定代 四年 遠藤みち子 四年 岩渕百合子 英一 加納登美子 英三 ぎやう子 三浦忠之丞 鈴木寅之進 根本和子 一見 清 森 まつ 千葉 定 黒澤良平 原田ことち 中村菊代 原田ことち 岡田佐和 三宅千代 ミス.リンゼー Allen K.Faust、Mrs.A.K.Faust E.3. Matsuko Hayashi
第7号	1927年	1. 大正15年3月卒業写真 2. 昭和2年3月卒業写真 3. 青年を歌へる 4. 小品及創作 ・闇 ・或少年の悲しみ ・You can only be an Imitator ・お里 ・兄弟 ・Rに寄せる断片手記 ・秋 ・秋 ・秋を見つめて ・木の葉のつぶやき ・外出日 ・夕暮れ ・夜のほひ朝のほひ ・雨の夜	土井晩翠 加納登美子 伏見レイコ 澤 杏子 椿 鄭 慶 鄭 慶 佐藤静枝 阿部正子 大和淑子 T・A 木村國枝 小野寺かつ子 澤木正枝

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・卵 ・かへりみち ・幼い日の心 ・愚痴 ・たそがれ ・散ったコスモスと残されたコスモス ・故郷の雑感 ・山に登りて ・逝きし幸子さん ・思ひ出 ・嵐の後	遠藤ミチコ 半澤 頼 S・E 生江西子 加藤きよ子 平 あい子 A・T 矢野恵智子 桑島邦子 加藤キヨ
		5. 詩歌 ・尾張野の歌 ・路 ・ふと思ふ ・思ひ出のままに ・寂しき夜 ・菊 ・笹 ・夕暮れに ・からす ・キュービーさん ・逝ける弟に ・短編四篇 ・ミハエルエルデンコの演奏会	中島慶治 菊地つね子 暁星 A・T 加藤きよ 椿 石田 幸 小島美千子 澤木正枝 Y・S 鄭 慶 時子
		6. 文学会記事 ・今秋の文学会 ・祝電祝詞 ・書簡 ・文学大会プログラム ・賛助会員宿所姓名 ・現在会員宿所姓名 ・宮城女学校校友会規則	委員 石水たか子
		7. 編輯後記	委員
第8号	1929年	1. 御大禮記念建設噴水池写真 2. 昭和3年度卒業写真 3. 文芸部大会英語劇写真 4. 昭和3年度校友会役員一同写真 5. 偶吟 6. 伝道者ツアラツストラ 7. 専攻科欄 創作及小品 ・呖笑(ニユライヴィッチ アントレーフ作) ・焼津にて(ラフカディオ ヘルン作) ・愛は勝つ ・語る ・矢 ・シュームス ・人形を見て ・冷き實體	土井晩翠 教授 文学士 中嶋慶治 英三 加納とみ子譯 英三 渡會美和譯 聖三 千繪子 聖三 めぐみ 英二 ルミ子 英三 岡 よし子 英予 高橋八重 英一 S・K

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・千代	英予 Y・T
		歌	
		・口なしの言葉 ・秋の感情 ・愁の春 ・歌十二首 ・淋しわれ	英三 くちなし 聖三 渡邊智恵子 英一 W 英一 橘川静枝 英一 T・O
		基督教女子青年会記事	
		・御殿場の修養会に就て ・女子青年会育児院児童クリスマス ・御殿場生活を思ひ出して	聖二 鈴木せん 高五 桑原 高五 岡崎艶子
		8. 高等女学科欄	
		創作及小品	
		・一番美しい顔 ・おのが姿をみつめて ・春のおとづれ ・叔父さんのお帰りの日 ・ひらかない窓 ・星を見て思ひ出すこと ・去り行く年 ・母いづこに居ますや ・帰郷もいいけど ・なくなった財布 ・或る夏の夜 ・読書 ・故郷へ ・或る一日 ・鉄の番人 ・春を待つ ・看護 ・漂泊の少女 ・海の惨事 ・窓外の景色 ・文芸会の夕 ・母 ・幼き日	五 石崎恒子 四 大原京子 三 佐藤千代子 二 芙紗子 一 谷井喜美 五 石田房子 四 佐藤静江 三 我妻さだ子 二 U・S 一 谷井たつの 五 加藤みよ子 四 紺野ゑん子 三 阿部とみ子 二 M子 一 新野貴美 五 俊 四 谷地歌子 三 石田幸子 二 M・O 四 中目ふみ 三 直海下枝 二 伊藤菊子 二 A・T
		詩歌	
		創作及小品	
		・わかれ ・愛鞭 ・寺の灯 ・ベニダリヤ ・除夜の鐘 ・星のみぞ知る ・をりをりに ・折にふれて	五 俊 五 武田いつ子 四 千枝子 五 庄司M子 三 大條公子 五 俊 三 千葉綾子
		9. 通信欄	
		10. 第36回文芸会記事	
		11. 賛助員住所氏名	

号数	年	目次(記事)	執筆者
		12. 会員住所氏名 13. 校友会規則	
第9号	1930年	1. 昭和4年度全校生徒写真 2. 昭和3年度卒業生写真 3. 文芸部大会写真 4. 「ファウスト」に就いて(講演) 5. 女性作家出でよ(講演大要) 6. 無名戦士を弔ふ(講演) 7. トマス・ハアデの宿命論 8. 婦人の言葉に就て 9. 神の約を慕ひて 10. 繁がれたる天馬 11. 創作及小品 ・妻を喜ばする為に(ハアディ作) ・日本の歴史(答案) ・乙女塚 ・戯曲 都落ち ・庭を見て ・妹 ・お祝の後 ・道ばたの花 ・寺内綾子夫人 ・清ちゃんと私 ・海の思ひ出 ・小春日和の午後 ・私のリリー ・ファウスト校長の御帰国の報を得て歌へる ・折にふれて ・芽 ・心 ・夕もや ・生きて居る ・島の小娘 ・常暗より ・雑詠 ・死よ汝はいづこにありや ・初春小景 ・折にふれて ・詠草 12. 基督教女子青年会夏期修養会記事 ・夏期修養会記事 ・修養会報告 ・夏期修養会報告 ・御殿場の修養会について ・修養会に出席して 13. 同窓会通信 14. 校友会規則 15. 賛助会員氏名	会長 ダクター・エ・ケ・ファウスト ラルフ・ホヂスン 廣濱東北大学助教授 賛助会員 中嶋慶治 賛助会員 菊澤季生 賛助会員 館岡 剛 賛助会員 黒澤良平 英三 武者公子 英三 境 節子 英一 R・S 英予 高木八十 高五 佐藤静枝 高五 徳江美恵子 高五 今野ますみ 高五 池田世起子 高四 我妻さだ子 高三 木箱 高三 M 高三 ふさ子 高二 渡邊愛子 同窓会員 諏訪時子 同窓会員 諏訪時子 家政 聡子 家政 聡子 家一 蜻蛉 聖予 砂原美沙 聖予 砂原美沙 聖三 千登世 聖三 杜 三子 聖三 津多枝 家一 眞沙 高四 宵待草 高女 三年 音二 片桐はる 音三 東野優子 音三 横山きゑ 高女四 我妻さだ子 高女四 吉田いね子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		16. 会員氏名 17. 同窓会員氏名	
第10号	1931年	謹みてファウスト前校長を送り クリーテ新校長を迎ふ 1. 宮城女学校前校長ファウスト氏御夫妻写真 2. 宮城女学校長クリーテ氏御夫妻写真 3. 昭和4年度卒業生写真 4. 文芸部大会写真(其の1) 5. 文芸部大会写真(其の2) 6. ファウスト前校長略歴 7. ファウスト校長の思出 8. 送別の辞 送別の辞 送別の辞 9. 宮城女学校の好機 10. 歓迎の辞(和譯) 歓迎の歌 歓迎の歌 11. 国字論の発達を観る 12. ジャポニカ日本周遊(ヘンリ・ヴァン・ダイク) 13. 品質(ジョン・ゴールスワージー作) 14. 創作及小品 ・家庭生活に於ける創造精神 ・友情の死(ハマトン著「人間交際論」の一章) ・日毎のあゆみ ・モツアルト(ローヤル・リーダー第5巻ヨリ) ・感謝と祈り ・ディビット・スウオン(ホーソン作) ・春の海の幻想 ・ある断片日記 ・白い水仙 ・月光に寄せて ・或る土曜日の日記 ・東の空 ・或る女 ・若い音楽家 ・三人のなまけ仲間 ・勇ましい錫の兵隊 ・机のみかんをみながら ・幸少き妹なれば ・ちぎれ雲 ・スキー ・人違ひ ・はかなき友に捧ぐ ・或る少年 ・寝坊 15. 詩歌 ・散文詩二篇(ツルゲネフ作) ・雨足	原田ことち 職員総代 黒澤良平 専攻科総代 阿部都喜子 高等女学科総代 我妻さだ子 校友会長 カール・デ・クリーテ 理事会総代 ケイ・アイ・ハンセン 専攻科総代 菊地たみ 高等女学科総代 小野寺かつ子 菊澤季生 同窓会員 佐々木榮子譯 英三 池内キヨ子譯 家三 堀籠豊子 英三 及川トキ子譯 家 H 英三 村上恭子譯 家三 ほりごめ 英三 片倉 徳譯 家二 みどり 英三 I・K 英一 T・S 白椿 英子 高五 岡 たかね 高四 T 高四 澤木正枝 高四 小野塚百合子譯 高四 奥山クニ 高四 憂愁 高三 A・W 高三 千葉孝子 高三 大友佳子 高三 今野政代 高三 齋藤房子 高三 新野木味子 高三 谷井喜美 英三 池内キヨ譯 道子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・草に訴へて ・詩二篇 ・まくらべに居て(外二篇) ・ある日 ・長濱にて ・永久の美しさ ・粉雪(外二篇) ・去り行く薔薇 ・小曲 ・矢車草 ・わかれ ・亡き母を憶ふ ・雑詠 ・つれづれに ・折にふれて	家二 みどり 英三 I・K 英三 緑瑤女 英一 澤田千代子 家一 H・U 高三 C・T 高三 A・W 高三 T・N 高四 片岡節子譯 英三 S 英三 及川トキ子 英三 緑瑤女 道子 家一 H・U 高五 千葉綾子 聖一 佐藤知子、英二 矢野恵智子 英三 阿部都喜子、英三 梶原藍子 高四 一見とみ 高五 小野寺かつ子
第11号	1932年	16. 女子青年会富士岡荘修養会報告 17. 同窓会員消息 18. バザーに関するミセス・ファウストの御手紙 19. ブーフル先生のお便り 20. 高等女学科同窓会消息 21. 英文専攻科同窓会消息 22. 聖書専攻科同窓会消息 23. 音楽専攻科同窓会消息 24. 家政専攻科同窓会消息	
		1. 昭和5年度卒業生専攻部写真 2. 昭和5年度卒業生高等女学部写真 3. ファウスト記念館全景及室内写真 4. 文芸大会写真 5. 母權論 6. 東北方言の特徴に就いて 7. 基督教教理、異端、及び分派 8. 科学的音楽理論とその教育的意義 9. 創作及小品 ・樞の木(イイ・ヴィ・ルukas) ・ブラツグタロス(ダンセニイ卿) ・お月様のお話 アンダーセン童話集より ・平安時代の服装 ・童話試作 ・美代ちゃんの羽子板 ・お餅 ・ショパン ・あをぞら ・角兵衛獅子 外一篇 ・追憶 ・都会の響き ・小徑に寄する 外一篇	東北帝国大学教授 中川善之助先生 賛助会員 菊澤季生 賛助会員 館岡 剛 賛助会員 高野 瀏 英三 矢野恵智子譯 英三 佐々木 信譯 英三 江刺家 愛譯 家三 佐々木ふみ子 家政科三年一同 家三 彰子 家三 富美子 音二 水戸照子 英二 みどり 高五 奥山 高五 蜚草 高四 齋藤房子 高三 戸田春子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・国語の出生に就て ・色彩と音響 ・罪と恩寵の分野 ・愛国(新渡戸博士) ・あこがれの国(ラゲレフ女史) ・高原の乙女に寄する(ワーズワス) ・都会の一隅(ローゼンブラット) ・古代英語の俄勉強 ・夜鶯と薔薇(ワイルド) ・手紙とうそ(ベネット) ・童話創作の研究(創作) (批評) ・児童教育の片々 ・断想 ・雑詠 ・巢立ちゆく ・晴れる日曇る日 ・雪割草のローマンス ・穴原に遊ぶ ・黄色の葉(スチヴンソン) ・心貧しきもの ・心 ・雪の思ひ出 ・我家のタベ ・愛する友 ・雪 ・たそがれの風景 ・遠方の父に ・読本巻一を終へて ・病める母に ・父母への手紙 ・兄さんへ	賛助会員 菊澤季生 賛助会員 高野 劉 賛助会員 館岡 剛 同窓会員 及川トキ譚 同窓会員 江刺家 愛譚 同窓会員 矢野恵智子譚 同窓会員 松澤英子譚 英文三年 平塚ミネ譚 英文三年 永沼美和子譚 英文三年 門間千曜子譚 家政三年 河野加代 家政三年 遠藤君江 家政三年 内海濱子 家政三年 三好幸子 家政三年 三好幸子 高女五年 すずめ 高女五年 C・T 高女五年 翠 高女五年 渡邊 愛 高女五年 渡邊せん 賛助会員 中島慶治 高女四年 S 高女三年 山本敏子 高女三年 一見よし子 高女三年 董 高女三年 今澤良江 高女三年 西村敏子 高女一年 鈴木稲代 高女一年 登坂美春 高女一年 小島弘子 高女一年 伊東京子 高女一年 新妻勝子
		4. 女子青年会欄	
		・夏期修養会報告(一) ・夏期修養会報告(二) ・夏期修養会報告(三) ・夏期修養会報告(四) ・夏期修養会報告(五)	聖書三年 笠原美沙子 音楽二年 早坂 花 聖書一年 齋藤徳子 高女五年 大友よし、千葉孝子 三品延子、石川百合 高女四年 佐藤ひさ子
		5. 旅行とキャンプ	
		・北海道旅行記 ・関西旅行記 伊勢詣 ・関西旅行記 二見が浦 ・関西旅行記 奈良見物 ・関西旅行記 京都 ・関西旅行記 京都二日目 ・作並キャンプ	家政三年 升 はる 高女五年 齋藤房子 高女五年 菅野小萩 高女五年 大友よし 高女五年 門山敏子 高女五年 谷井たつの 家政二年 佐沼恵奈子
		6. 同窓会欄	

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・同窓会会計報告 ・第17回生宮城様の歓迎会 ・会員消息 高等女学部(24回、27回、28回、29回、30回、31回、33回、34回、35回、36回、37回、40回) ・会員消息 専攻部家政科(13回、16回) ・会員消息 専攻部英文科(8回、10回、12回、15回) ・会員消息 専攻部音楽科(10回) ・東京支部 ・札幌支部 ・専攻部聖書科 ・ミス リンゼイを送る集ひ 7. 説教と講演 ・人を奴隷とする自由と人を自由とする服従 ・仙台を中心とせる郷土史 ・食物と健康 三陸沿岸地方震災義捐 編輯後記 ビクターコロムビアレコード 広告 フランスパン常食改善会 広告	クリイテ校長 齋藤報恩会主事 小倉博氏 東北帝国大学教授 近藤正二博士
第13号	1933年	昭和9年度生徒募集 1. 口繪写真目次 ・昭和8年3月専攻部卒業生 ・昭和8年4月高女部新入生のニコニコ ・昭和8年3月高女部卒業生 ・5月高女5年関西旅行(104頁参照)、専攻部大高森へ遠足 ・6月同窓会バザーの校庭(113頁参照) ・菊地よし子姉妹歓迎会(7年11月)、英文科同窓会(8年6月一見先生撮影) ・同窓生写真 - 弘前の同窓生(6月職員十和田遠征の際、一見先生撮影) 33回生会(5月、115頁参照) ・7月蔵王登山(一見先生撮影、108頁参照)、高山キャンプ(109頁参照) ・7月音楽三年演奏旅行(11頁参照)、10月山の寺へ遠足(110頁参照) ・専攻部バスケット選手、高女部バスケット及バレー選手(33、106頁参照) ・10月大運動会(33頁、107頁参照) ・11月文芸大会(30頁参照) ・11月仙台市内女学校総合音楽会に出演した合唱団(公会堂にて) ・12月大演奏会に出演のウエルクマイスター及びシロタ氏 ・10月宮城 尚綱女子青年総合修養会(99頁参照) ・12月急死された石田房子先生(80頁参照) 2. 校報欄 ・9年度生徒募集 ・本校創立50周年近づく ・三陸震災義捐金報告 ・寄附謝禮 ・第41回卒業式 ・卒業生状況 ・学校日誌 ・在学生徒数	

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・音楽科報告 ・挨拶 ・国粹について ・満足と不満と何れが尊いか	クリエイト校長 東北帝大教授 山田孝雄博士 クリエイト校長
		3. 校友会欄 ・文芸部報告 ・音楽部報告・運動部報告 ・会計部報告 ・庶務部報告	
		4. 学芸と想華 ・聖書が神の著書たる論理 ・御健康を祈る ・禅と基督教 ・こどもびくしょう・珍しい植物 ・四季とりどり ・雑詠・タイム ・折にふれて ・夢つくり ・基督教主義専門学校の目的 ・愛の唄 ・最後の臺詞(チェホフ作) ・職業婦人の生活標準 ・亡き石田先生を偲びて ・折にふれて ・クリスマスの晩 ・夏の思ひ出 ・先生 ・国民建設者なる家庭 ・学窓を去らんとして ・夕立 ・月見草 ・賢い保険代理業者 ・海浜学校の日 ・晩鐘 ・火事場の跡 ・忘れ得ぬ物語 ・裏の朝顔 ・田園の夕 ・妹 ・思ひ出 ・銀河 ・東京見物 ・コスモス ・冬	賛助会員 舘岡 剛 賛助会員 濱田長松 賛助会員 小島次男 同窓会員 阿部 節 同窓会員 鈴木瑛女 同窓会員 佐藤てい 同窓会員 彰子 同窓会員 平塚峰子譯 英文三年 大内タケ譯 英文三年 Y・M譯 英文三年 酒井原初子譯 家政三年 田村 孝 音楽科 C・T 聖書科 某生 聖書一年 K 聖書一年 金子あき 英文予科 佐々木繁子 高女五年 Z・L譯 高女五年 三毛猫 高女五年 熊谷きよ子 高女五年 平間ゆき子 高女五年 W・Y譯 高女五年 庄司みつ子 高女五年 熊谷きよ子 高女四年 S・I 高女三年 大原春子 高女二年 コスモス 高女二年 伊東京子 高女二年 山田泰子 高女一年 星 英 高女一年 I・M 高女一年 原田温子 高女一年 菊地弥栄子 高女一年 I・M
		5. 女子青年会欄 ・高女部行事報告 ・フライデースクール ・第5回宮城・尚綱総合修養会	聖書科 荒木つや

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・御殿場修養会報告 ・御殿場修養会報告 6. 旅行・スポーツ・登山・キャンプ ・関西旅行の記 ・スポーツあれこれ ・蔵王登山の記 ・高山キャンプの一日 ・山の寺遠足 7. 同窓会欄 ・会計報告・本部報告 ・御禮 ・お便りいろいろ ・東京支部報告 ・神戸支部報告・札幌支部報告 ・会員消息(高等女学部) ・聖書科 ・笠原みさ姉のことも ・家政科 ・在仙英文科卒業生の集ひ ・英文科 ・音楽科 8. 橄欖規定	専攻部 早坂 花 高女部 鈴木義子、菅原タツ、岡村直子 高女五年 岡 ちとせ、菅原タツ、大橋八千代 家政二年 高橋しげ子、田中禮子 高女二年 馬場年子 高女一年 和泉幸子 原田ことち 赤城茂代
第14号	1934年	1. 口繪写真目次 ・昭和9年度新入学生 ・専攻科卒業生(昭和8年度) ・高等女学部卒業生(昭和8年度) ・遠足(蒲生海岸) ・高女5学年修学旅行(奈良若草山麓にて) ・文芸会(ヘンデルとグレッテル) ・ミス・ピターソン独唱音楽会 ・英文科同窓会 ・30回卒業生在仙クラス会 ・創立50周年記念事業最初の委員会 ・故ミス・シュネーダーを偲ぶ 2. 校報欄 ・創立50周年記念事業委員会経過報告 ・第42回卒業式順序 ・在校生徒数 ・学校日誌 ・クリーテ校長の休養渡米を送る 3. 講演と説教 ・嵐に備へて建てよ ・金本位制を中心として見たる経済の現状 ・故メーリ・シュネーダー姉葬儀に於ける説教 ・メーリ・エリザベス・シュネーダー履歴 ・弔辞 ・弔辞 ・弔辞	クリーテ校長 七十七銀行営業部次長 坂井二郎 シー・デー・クリーテ 山田操 宮城女学校職員総代 シー・デー・クリーテ 宮城女学校生徒代表 小崎安喜子 宮城女学校同窓会代表 原田ことち

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・召されしミス・シュネーダーを偲びて ・ミス・シュネーダーの想ひ出	木村花子 17回卒業生 笹 愛
		4. 校友会欄	
		・昭和9年度上半期校友会報告	
		5. 学芸と想華	
		・聖書解釋者の個人的資格 ・国語の品詞の分類に就て ・パウロに於ける信仰と行為	賛助会員 館岡 剛 賛助会員 菊澤季生 賛助会員 小島次男
		卒業に際しての小感想集	
		・青い花 ・貝殻 ・父みまかりて ・聖日の朝に ・無題 ・廻れ右 ・あこがれ ・初夏のひと時 ・神への切なる願ひ ・母の祈り ・春 隠れた美 ・春 青白き日 ・春 ・主にゆだねて ・雑詠 ・牧師に物を聴くの会 ・感ずるままに ・空と幻想 ・母をうたふ ・Extract from Melancholy of the Countryside by Sato Haruo ・或る夕方 ・或る夜亡き弟を追憶して ・遠き友に送る ・この黒髪 ・お留守番 ・チンドン屋 ・お団子 ・始めての歌 ・坊やの夢 ・時 ・春雨の夜 ・春の夜 ・春 ・またたく星 ・皇太子殿下の御降誕 ・親の恩 ・夏休みの思ひ出 ・兎	卒業生 遠藤清子 卒業生 遠藤清子 T子 T子 T子 沫那光 T子 聖書二年 K 聖書二年 K 英文二年 つりがね草 英文三年 睦子 I・T B二年 S T・S S科 S子 家政 Z・A
		6. 女子青年会欄	
			高女五年 紺戸敦子 高女五年 遠藤 緑 高女四年 高女四年 菅野友子 小川幸子 高女四年 飯淵梅子 高女三年 高女二年 後藤 幸 高女二年 服部佳子 高女二年 和泉 幸 高女二年 中山新子 高女二年 小野球子 高女二年 上石マスコ 高女一年 細谷その 高女一年 橋本よし子 高女一年 佐々木英子 高女一年 齋藤まつ子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・専攻科報告 ・女学部報告 ・雑誌部報告 7. 旅行記事 ・関西旅行日記 8. 同窓会欄 ・同窓会会計報告 ・英文科同窓会記事 ・神戸支部報 ・東京支部ニュース ・聖書科だより ・告ぐ ・昭和8年度決算報告(自8年4月至9年3月) ・卒業生消息(32回) ・野菊会開催の記 ・第30回生 ・英文科ニュース ・50周年記念史料御願 ・ミス シュネーダーの遺筆集御願	高等女学部第五学年
第15号	1934年	1. 口繪写真目次 ・8月歸校せられたるミス、ハンセンとミス、リンゼー ・25年御勤続の鈴木寅之進先生 ・文芸会高女4、5年英語劇 ・文芸会家政科劇 ・運動会 ・磐梯山登山 ・遠足(松島にて) ・宮城女学校尚綱女学校合同女子青年会修養会 ・8月、急に永眠せられたる伊藤英吾先生 2. 校報欄 ・基本金募集概要 ・学校日誌 ・在学生徒数 ・文芸部報告 ・大運動会 3. 学芸と想華 ・浪漫派の音楽 ・パウロに於ける神秘思想と倫理 ・「ヴェニス」の商人の裁判を評して ・短歌(秋風哀吟、海邊春日) ・平和を愛する心 ・早朝に想ふ ・緑にぬれつ ・美和河の乙女 ・道化師 ・夜明 ・清水寺に合ひし ・失望	賛助会員 高野 瀏 賛助会員 小島次男 同窓会員 平山信子 同窓会員 黒蝶 聖書三年 斎藤徳子 聖書三年 斎藤徳子 聖書三年 徳子 艶子 中谷明子 島田榮子 東時代 家政三年 M・M

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・いこひ	家政三年 M・M
		・発見	家政三年 M・M
		・薔薇の妖精	英文科 F・K
		・理想?	音学一年 M・F
		・生くる道	音楽科 M
		・時江の死	聖書三年 吉田きみ子
		・うれしい便	高女一年 押野和子
		・星	西井ミイ
		・無邪気な妹	高女二年 大浦徳子
		・雪	高女二年 中山新子
		・銀杏木	高女三年 鈴木瑞子
		・落葉	高女四年 菅野友子
		・照る月	高女二年 佐々木富久子
		・小菊	高女二年 小新井圭子、小宮三千代
		・鼠	高女一年 田邊悦子
		・犬の親子	高女一年 小川みち
		・馬	高女一年 手島満里子
		・落葉の路を八木山	高女二年 氏家郁子
		・故郷	高女二年 原田温子
		・秋を聴く	高女二年 和泉幸子
		・夜	高女二年 小宮三千代
		・秋の夕暮	高女三年 小島弘子
		・糸	高女四年 田口信子
		・十六夜	高女五年 鈴木義子
		・暮鐘	高女五年 紺戸敦子
		・帰へる日	高女五年 小林糸子
		・足跡	泉 澄子
		4. 女子青年会欄	
		・第2学期青年会行事事項	
		・雑誌部訪問会報告	
		・女子青年会夏期修養会報告	
		・第6回宮城、尚綱総合演奏会	
		・学生聯盟成立に際して	斎藤徳子
		5. 同窓会欄	
		・昭和10年3月専攻部卒業予定者	
		・栄養料理講習会	
		・三株の白百合	岡部せん子
		・土曜会報告	鈴木達子
		・茶の会	西條邦子
		・活花の会	岩沼高子、蟻坂幸子、岡 ちとせ
		・獨乙会	
		・習字会	
		・早坂先生歓迎会	
		・東京同窓会報	
		・近感	石丸直子
		・家政科第5回生	氷見いと子
		・仙台ニュース英文同窓会	
		・ケテーさんのお集り	

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・東京ニュース ・英文科8回生 ・40回卒業生クラス会報告 ・神戸ニュース ・舊き友を迎へて ・感じたまま ・第20回 ・第32回 ・聖書科便り ・通常同窓会会計報告 ・鈴木寅之進先生勤続25年祝賀寄附者芳名 ・同窓会員名簿	一同窓生
第16号	1935年	1. 口繪写真目次 ・高等女学部新入学生 ・高等女学部卒業生 ・専攻部新入学生 ・専攻部卒業生 ・オラトリオ「ホーリーシティー」演奏会 ・北山ヘビクニック女子青年会 ・ホフマン先生送別会 2. 説教欄 ・光の生命 ・昇天祭に於ける説教 3. 学芸と想華欄 ・近代の科学より観たる生命観 ・日本精神 ・歩き方と心持 ・机 ・女学生になって ・叔母さま ・雀 ・青葉 ・藤緑 ・亡き兄をしたひて ・或夜の出来事 ・落日 ・そぞろ歩き ・あきらめ ・憶ひ出 ・遠足 ・久遠の道 ・さみとの空 ・心の動くままに ・水すまし ・はてしなき幸 ・月見草 ・雑感 ・六月の微笑	フェスパーマン 賛助会員 館岡 剛 賛助会員 佐藤義雄 賛助会員 山本信道 女学一年 菅原敏子 女学一年 薄場みえ子 女学一年 三宅多賀子 女学一年 草刈恵子 女学二年 鈴木安子 女学二年 大庭龍子 女学二年 三品恒子 女学二年 齋藤まつ子 女学二年 田邊悦子 女学二年 三品恒子 女学三年 原田温子 女学三年 岩井光枝 女学三年 和泉幸子 女学三年 中山新子 女学四年 小島弘子 女学四年 小島弘子 女学四年 丹野静子 女学四年 高橋昌子 女学四年 佐藤てる子 女学四年 新妻勝子 女学五年 佐々木節子 女学五年 畠中秀子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・関東関西地方修学旅行日記 ・折にふれて ・子供の世界に ・夏の天地 ・折にふれて ・或る日に ・或る印象 ・緑の蔭に ・壁の絵 ・和歌 ・雑 ・日記 ・旅役者 ・夢と現 ・道路 ・緑に題す ・農村と都会 ・此頃思ふこと ・聖別 ・暗涙光 ・かよちゃんをお慰ひして	女学第五学年 聖書科 石塚照子 棚木トシ子 棚木トシ子 聖書科 某 聖書科 某 鈴木淑子 英文科 みどり 英文科 工藤信枝 英文科 翠 家政科生 えみこ 家政科 T 鈴木淑子 庭恵巢 Y・L S 小崎安喜子
		4. 女子青年会欄 ・女学部 ・第三学期 ・専攻部 ・光 ・一切のこと愛をもて行へ ・第三学期 ・第一学期 ・財政部 ・青年会雑誌部 ・販売部 ・誘導部 ・社交部をお引きうけて ・お仕事 ・奉仕部 ・フライデースクールに就いて	田口信子 顧問 小島次男 会長 石川百合子 佐藤賜子 金子 秋 鈴木きく 蟻坂こう子 岡 ちとせ 虎岩とも子 石塚照子 棚木トシ子
		5. 同窓会欄 ・学校からの御礼 ・仙台同窓会の集り ・英文科ニュース ・家政科ニュース ・聖書科ニュース ・春の同窓会の報告 ・母校修学旅行団を迎へて ・思へ出づる人々 ・通常同窓会会計報告 ・定期預金報告	神戸同窓会支部 庄子克美 家政五年 絃子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		6. 校報欄 ・ 学校日誌 ・ 第43回卒業式順序 ・ 本校職員人名 ・ 卒業生の状況 ・ 在学生徒数 ・ 寄附謝禮 ・ 東北冷害地義捐金報告 ・ 五拾周年記念事業報告 ・ 校友会記事 第一回仙台夏期婦人講座 ①俳句の鑑賞/東北帝大教授 小宮豊隆 ②營養に関する23の話/東北帝大教授 近藤正二 ③仙台に於ける建築(幻燈使用) /仙台高工教授 小倉 強 ④西洋画の技巧について(幻燈使用) /東北帝大助教授 兒島喜久雄 ⑤音楽心理(レコード使用) /本校講師 東北帝大副手 高野 瀏	
第17号	1936年	1. 口繪写真目次 ・ 海上雲影 ・ 文芸会 童踊 ・ 文芸会 高女五年劇 ・ 文芸会 英文科劇 ・ 文芸会 家政科劇 ・ ライダル先生独唱会 ・ 御茶会 ・ 二十五日会 ・ 聖書科盛岡訪問 2. 学芸と想華 ・ そらを仰ぐ心 ・ Treasures ・ 名匠の教室を見る ・ A Little Comment on Smile ・ ローマ書一章十八節及至三章廿節の分類に就て ・ 瀬戸内海點綴 ・ 私共の生活 ・ 卒業に際しての感想 ・ 自殺 ・ 新年風景 ・ 札幌の冬 ・ 真実と嘘 ・ 想ひ ・ 思ひ出 ・ 冬 ・ 和歌 ・ 和歌 ・ 和歌 ・ 和歌 ・ 宵の星 ・ あきらめ	賛助会員 中島慶治 H.P.Smith 山田 操譯 平出サタコ 賛助会員 小島次男 小野玉枝 高女五年 佐藤貞子 高女五年 大場ワカ 高女五年 横尾清 高女四年 佐藤てる子 高女四年 松坂欣榮子 高女四年 高橋昌子 高女四年 尾形しゆく 高女四年 鈴木瑞子 高女四年 岩佐清子 高女三年 小宮三千代 高女三年 和泉幸子 高女三年 原田温子 高女三年 佐々木富久子 高女三年 千鳥 高女三年 夢路はるか

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・湖邊 ・召されし友 ・小供の兵隊さん ・黄昏 ・雪二題 ・我が幼時 ・私の嫌ひなもの ・針 ・私の好きな歌 ・淋しいお家 ・夏会津白虎隊の墳墓に詣で ・或女店員よりの書簡 ・月見岬キャンプ 3. 女子青年会欄 ・第二学期各科報告 4. 同窓会欄 ・愈本年が創立50周年 ・創立50年記念委員会総会 ・音楽科消息 ・第43回 ・同窓会 ・在仙英文科同窓生の会 ・聖書科たより ・第32回生消息 ・通常同窓会会計報告 5. 校報欄 ・学校日誌 ・寄附謝禮 ・年末同情金報告 ・活花の会 ・日本書の会 ・25日会の記 ・聖書科3学年の見学旅行 ・キャンプ7月27日高山海岸にて ・蔵王登山 ・運動会記 ・バレー部の思ひ出 ・籠球部 ・文芸部報告 ・編輯後記	高女三年 岩井光枝 高女三年 原田温子 高女二年 山本初子 高女二年 鵜田美や子 高女二年 三浦しん 高女二年 山村多賀子 高女一年 酒井原和子 高女一年 菅原敏子 高女一年 三宅多賀子 高女一年 鹿岡糸子 聖書科 紫 峰 英文科 T子 聖書三年 仁子 一見 清
第18号		欠号	
第19号	1937年	1. 口繪写真目次 ・キャンプ場スケッチ ・大講堂定礎式 ・本年度高女部第一学年生 ・宮城、尚綱両女学校女子青年会総合修養会 ・大連同窓会 ・本年度キャンプ発会式	大越光風

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・キャンプの或日 ・登山隊一行(蛾ヶ温泉にて) ・登山隊一行(蔵王にて) ・運動会	
		2. 講演	
		・昭和11年度卒業説教 馳場を走れ ・生物界の神秘 ・欧州宗教文芸史(筋書) ・ローマ字書き方の統一 ・国民歌謡 ・逆コース満州ところどころ ・小品文 ・ヘンリー、ヴァンダイク ・手をひきて 鈴木みゆきさんとヘレンケラー講演会に行く 或る日盲学校にて ・をりふし姉に妹のよめる	クリーテ校長 一見 清 中島慶治 菊澤季生 菊澤季生 小野玉枝 同窓会員 S・T 同窓会員 S・T譯 女25 池田ふみ
		・シエリーと『フロメシウス アンバウンド』に就いて	家5回生 氷見伊都子 女32回生 鈴木玖磨子 女36回生 遠藤道子 女28回生 中村菊代譯
		3. 文苑	
		・帰省 ・北海道 ・登山 ・御殿場の思出 ・思ひ出 ・明日を思ふ ・をたまき ・夕ぐれの丘 ・若き心 ・我が家庭 ・ある夜 ・宮城女学校に入学して ・噴水と薔薇のアーチ ・或る日 ・秋の墓地 ・五月の迷ひ ・夜の窓辺 ・校長の挨拶 新年のあいさつ ・教職員一同挨拶「時局につき年賀欠禮仕候」	高女一年 柳原千代子 高女二年 石田洋子 高女三年 白石よし子 高女四年 高橋玲子 五年 服部佳子 五年 和泉幸子 五年 和泉幸子 五年 岩井光枝 五年 原田温子 英文予科 出村絢 英文予科 細谷たか子 英文予科 志賀恭子 英文予科 長谷川キミ 英文予科 熊田秋子 英文予科 木竹利意子 秋 由美子 秋 由美子
		4. 同窓会欄	
		・佐伯欣子様よりの御便り ・富士を仰ぐ ・朝鮮たより	佐柳千代、赤澤(秋保)田島、伊都子 八島秀子 市岡小松
		5. 秋季同窓会記	
		女学部	
		・22回	

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・ 24回 ・ コスモスの会の記 ・ 30回の皆々様へ ・ 30回 ・ 31回 ・ 38の回消息 ・ 39回 ・ 41回 ・ 42回 ・ 44回 ・ 45回 家政科 ・ 21回 学生会報告 英文科 ・ 8回 ・ 9回 ・ 10回 ・ 17回 ・ 20回 音楽科 ・ 9回 ・ 11回 ・ 18回 ・ 19回 聖書科 ・ 聖書科 ・ クラスニュース 6. 校報欄 ・ 学校日誌 ・ 在学生徒数 ・ 寄附謝禮 ・ 大講堂定礎式次第 ・ 宮城女学校家庭会記録 ・ キャンプ ・ 運動会記事 ・ 登山 ・ 蔵王登山の思出 ・ 有志富士登山 ・ 講習部報告 ・ 通常会計報告 ・ 記念基金應募者芳名 7. 女子青年会 ・ 篝火の集りの心理 ・ 感想 ・ 富士岡荘 ・ 第32回御殿場修養会報告 ・ 御殿場修養会に出席して	丸山敏子 青年会賛助員 蟻坂孝子 女学科青年会 中山新子 専攻部 専攻部青年会 工藤敏子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・全国総会に出席して ・クラブ奉告	石塚照子
第20号	1938年	書 1. 写真 ・文芸会 ・キャンプ、遠足、運動会、勤労奉仕 ・東京同窓会 2. A Message to Miyagi College Graduates 3. 学芸と想華 ・ダンテに於ける時代と精神の相関(ダンテ研究への一序曲) ・重い水の話 ・瞬間の美 ・英詩紹介 ・マンスフィールドの芸術的価値 4. 文苑 ・(題名無し) ・人生と愛 ・キャンプ日記 ・猫 ・大水 ・告別式 ・汽車の中で ・修学旅行 5. 女子青年会欄 ・御殿場修養会報告 ・キャンドルサービス ・東山の二病院を訪問して ・協議会 ・夕拝 ・第10回宮城尚綱総会修養会 ・修養会についての感想 ・ひのきの樹蔭 6. 校報欄 ・学校日誌 ・銃後行事 ・文芸部報告 ・同窓会の皆様へ ・運動会 7. 同窓会欄 ・昭和13年底務報告 ・同窓会通常会計報告 ・聖書科だより ・家政科ニュース ・英文専攻科 ・卒業生消息 ・東京支部秋季同窓会次第 ・住所変更 ・弔辞	大越 直 題 Carl D. Kriete 宮崎信彦 田島治兵衛 平出サタコ 大内タケ F・C 英文二年 佐藤静子 家政科一 白バラ 高女一年 小宮里子 英文二年 佐藤 静 三年 登坂ときわ 四年A組 南條和子 四年B組 柴田米子 高女五年 三品恒子 高女五年 三品恒子 五年 山村多賀子 五年 佐々木温子 四年A組 南条和子 四年A組 林 みえ子 音楽科二 鹽見 敏 専攻部 長谷川キミ

号数	年	目次(記事)	執筆者
第21号	1940年	書 1. 写真 ・学内所見 ・勤労奉仕 ・弓道部 ・女子青年会歓迎会 ワイドナー先生履歴 早坂先生を憶ふ 2. A Message to Miyagi College Graduates 3. 学芸と想華 ・聖母の軽業師 ・基督教の特異性 ・秋雑詠 ・兵隊さんと達磨さん ・私の古いノートより ・幸福とは ・仙台べん 4. 文苑 ・新緑の郊外 ・秋蛩集 ・河畔の落日 ・英文二年雑詠集 ・秋 ・奉天の言葉 ・遠足 ・日向で ・つりばし ・青葉城趾 ・選挙 ・俳句について ・修学旅行日記 ・修学旅行日記 ・修学旅行日記 5. 女子青年会欄 ・1939年度の会の歩みを顧みて ・御殿場修養会の協議会について ・YWCA修養会に出席して ・御殿場修養会報告 ・聖書のクラスについて ・キャンプファイヤー 6. 校報欄 ・学校日誌 ・運動会 ・寄宿舎だより ・学校への賜物 7. 同窓会欄 ・昭和14年度庶務報告 ・同窓会通常会計報告	一見先生 Carl D. Kriete 原田ことぢ Carl D. Kriete 宮崎信彦 小島次男 黒蝶女 黒蝶女 平出サタヨ 後藤藤子 岡部せつ 英文二年 和泉幸子 英文二年 和泉幸子 英文二年 和泉幸子 音楽二年 勝本稔子 一年 瀬戸堯子 一年 熊坂たか子 一年 福地禮子 三年 秋保美代子 三年 安積愛子 四年 鈴木文子 五年 柴崎千恵子 五年A組 白石よし子 五年A組 南條和子 草刈恵子 聖書科 丹波セツ 英文二年 熊田秋子 家政科二年 石田みどり 四年 石田洋子 五年A組 草刈恵子、南條和子 前川清子

号数	年	目次(記事)	執筆者
		・聖書科だより ・家政科ニュース ・近況 ・46回卒業生クラス会記 ・東京支部ニュース ・住所変更 ・第47回女学部卒業生近況 ・編輯後記	7回生 加藤とら



1943（昭和 18）年度卒業生の学籍簿 —宮城高等女学校の「学校挺身隊」—

資料室 佐藤 亜紀

はじめに

一．発見の経緯

「宮城女学校の学校日誌はありますか」との一件の問い合わせが、今回の学籍簿に関する調査の始まりだった。宮城学院は、1886（明治 19）年、現在の中学校・高等学校に相当する宮城女学校から始まり、2021 年で、創立 135 年目を迎えた。私は資料室の担当として勤務して 4 年目になるが、「学校日誌」が存在するかどうかわからなかった。そこで、丸山仁先生（宮城学院中学校高等学校教頭・社会科教諭、資料室運営委員）に、「学校日誌」について尋ねてみた。丸山先生は、倉庫を探してくださり、「学校日誌」は見つけることができなかったが、1940 年代に卒業した方々の「学籍簿」があると教えてくださった。そこで早速、中高倉庫に伺い、「学籍簿」の二つの束を確認した。

二．学籍簿五冊

ここに紹介する資料は二つの綴り込み表紙に綴じられ、ビニールテープで括られていた。一つは、「高等女学校学籍簿 昭和十六年度 全十七年度 全十八年度」（以後、A と呼ぶ）、もう一つは「高等女学校卒業学籍簿 昭和十九年度」（以後、B と呼ぶ）と背表紙に書かれていた。A には、綴り込み表紙を付して綴じられた、外側の綴り込み表紙の背表紙に書かれた年代の三冊の学籍簿が、また B にも同様に、二冊の学籍簿がそれぞれ挟み込まれていた。この五冊の「学籍簿」の表紙に書かれた卒業年度を簿冊名称とし、入学年月・卒業年月・在籍生徒数を加えて示したのが表 1 である。1940（昭和 15）年 4 月に入学し、1944（昭和 19）年 3 月に四年生で修了した生徒達の学籍簿は見当たらなかった¹。

三．1943（昭和 18）年度卒業生の「学籍簿」について

現在資料室では、五冊の「学籍簿」をデータ入力し、今後は写真撮影を行ってデジタル資料化することを検討している。今回、本年報では、③の「1943（昭和 18）年度卒業生学籍簿」を取り上げる。その理由は、1943（昭和 18）年度は、宮城県の多くの高等女学

¹ 1940 年 4 月入学生が四年生に進級した 1943 年 4 月、「中等学校令」により宮城女学校は五年制から四年制に変わった。それにより、翌年 3 月、(1)四年生で修了する、(2)五年生へ進級する、(3)専攻科に進学する という 3 つの選択肢が示された（『戦時下の宮城学院』8 頁）。見当たらない学籍簿というのは、(2) 以外を選択した生徒たちのものである。

表1

	簿冊名称	入学年月	卒業年月	在籍 生徒数(名)
①	1941(昭和16)年度 卒業生	1937(昭和12)年4月	1942(昭和17)年3月	42
②	1942(昭和17)年度 卒業生	1938(昭和13)年4月	1943(昭和18)年3月	50
③	1943(昭和18)年度 卒業生	1939(昭和14)年4月	1944(昭和19)年3月	92
④	1944(昭和19)年度 卒業生 五年生	1940(昭和15)年4月	1945(昭和20)年3月	43
⑤	1944(昭和19)年度 卒業生 四年生	1941(昭和16)年4月	1945(昭和20)年3月	188

校が、卒業と同時に卒業生を挺身隊として軍需工場（東京第一陸軍造兵廠仙台製造所）に送り出した年度だからである。本校でも挺身隊が組織されたが、その記録について本校の年史等での記載は無い（『宮城学院七十年史』、『宮城学院八十年小誌』、『天にみ栄え』等）。唯一記載があったのは、『戦時下の宮城学院』（2002年11月刊行）、『戦時下女学校の学徒勤労動員』（2004年10月刊行）の二冊である。そこには「学校挺身隊に89名中16名が参加」と書かれてあった。しかし、今回、学籍簿のデータ入力を行う中で、1943（昭和18）年度卒業生の「卒業後の状況欄」に「挺身隊造兵廠」「挺身隊」と記載されている生徒は30名に及んだ。少々の数字の差異ならわかるが、16名と30名では倍近く違う。さらに、その記載の仕方に上記のような二種類の書き方がなされているのはなぜかという疑問も新たに浮かんできた。

一つの項目で、二種類の書き方がなされているのは、他にもいくつかの項目に見られた。例えば、「卒業後の状況欄」や「卒業年月日」の記入の有無についてである。表2は、この二通りの記載方法を整理したものであるが、これを見て明らかのように、パターンAとパターンBが項目ごとに截然と分れている。人数はパターンAが41名、パターンBが44名、それ以外が7名である。7名の内訳は、パターンA・Bの規則性から外れる者が3名、五学年次の成績表の記載がない者が4名である。以上のことから、1943（昭和18）年度は、ニクラス制で、学籍簿の内容に書き方が二通りあるのは担任の違いによるものと推測される（写真1・2）。

この学年の生徒たちが入学した年から卒業するまでの歩みの中で、「戦争」が学校生活に入り込んでくる様子を「学籍簿」から読み取るとともに、資料室に保管する資料を参考にしながら、この年度の「学籍簿」を精査してみたい。

卒業後の状況	性行調査表						成績表					
	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
挺身隊造兵廠							第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
							77	77	67	72	71	78
考 備							75	77	81	80	80	80
							70	69	72	77	80	72
所屬教會							78	75	81	80	80	80
							75	62	58	58	56	78
年							82	59	59	62	81	81
							82	58	58	58	58	58
月							76	76	76	76	76	76
							79	79	79	79	79	79
日							50	50	50	50	50	50
							55	55	55	55	55	55
							77	77	77	77	77	77
							72	72	72	72	72	72
							73	73	73	73	73	73
							73	73	73	73	73	73
							76	76	76	76	76	76
							72	72	72	72	72	72
							89	89	89	89	89	89
							72	72	72	72	72	72
							10	10	10	10	10	10
							29.9	29.9	29.9	29.9	29.9	29.9
							1398	1398	1398	1398	1398	1398
							22	22	22	22	22	22
							167	167	167	167	167	167

写真1 「パターンA」の生徒の成績表

表2

項目	パターンA	パターンB
卒業年月日	記入あり	記入なし
「卒業後の状況」が挺身隊の場合	挺身隊造兵廠	挺身隊員
「卒業後の状況」が本校専攻科進学の場合	宮城〇〇科	本校〇〇科入学 本校専攻部〇〇科入学
「成績表」武道教練科目の表記	体武教	武道教練
五学年次の性格	記入なし	記入あり

卒業 後ノ 状況	性 行 調 査 表						成 績 表									
	第 五 學 年	第 四 學 年	第 三 學 年	第 二 學 年	第 一 學 年	學 年 項 目	第 五 學 年	第 四 學 年	第 三 學 年	第 二 學 年	第 一 學 年	學 年	學 科 目			
授身隊員	澤良					性	81		78	93	88	80	89	書	修	身
							83		86	85	87	84	法	民	公	
							80		83	82	88	40	讀	講	文	
								78	87	88	41	文	文	作		
							83		81	83	85	83	法	字	方	
	方正					質	85	語英			88	42	議	解	譯	
							87	89	93	42	會	話	會			
							84		91	67	法	文	作			
							80	通武	90	92	文	文	作			
							72	練教			字	習	字			
考 備 所 受 洗 教 會 年 月 日	勤知					行	80		87	82	84	78	史	歷	地	
							80		95	81	91	69	理	文	學	
							78		59	81	87	88	科	理	圖	
							63	家物	65	63	80	79	書	畫	事	
							72	物生	73	80	83	77	育、衛、看	裁	藝	
	瑞正					動	85		78			84	均	定	裁	
							69		73	81	86	84	均	定	裁	
							78		84	83	84	40	均	定	裁	
							82		82	87		50	均	定	裁	
							1547		1351	1318	1307	1605	均	定	裁	
梅敬					情	78		79	82	87	84	均	定	裁		
								82	86		45	均	定	裁		
						87		87	86		45	均	定	裁		
						42		31	21		6	均	定	裁		
								10	10	10	11	均	定	裁		
特 殊 地 域 等 好					語			249	225	215	223	數	時	業		
								1295	1264	1446	1256	數	時	業		
								17	1		1	數	時	業		
						33		40	15	7	6	數	時	業		
						213		227	86	44	34	數	時	業		

写真2 「パターンB」の生徒の成績表

1. 1943（昭和18）年度卒業生「学籍簿」データ（68頁から72頁）

番号	入学年月日	卒業年月日	入学前の学歴		親の職業	卒業後の状況
1	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	大谷小学校卒業	雑貨商	挺身隊造兵廠
2	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	鉄道機関士	挺身隊造兵廠
3	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	北五番丁小学校一年修了	無職	挺身隊造兵廠
4	昭和16年6月21日	昭和19年3月8日		大阪女学院ヨリ第三学年ニ転入		挺身隊造兵廠
5	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	商業	挺身隊造兵廠
6	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	菓子商	挺身隊造兵廠
7	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	官吏	挺身隊造兵廠
8	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
9	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	重炭商	挺身隊造兵廠
10	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	女川小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
11	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	東北学院書記	挺身隊造兵廠
12	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	北五番丁小学校高等科一年修了	農業	挺身隊造兵廠
13		昭和19年3月8日				挺身隊造兵廠
14	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
15	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	原町小学校卒業	鉄道官吏	挺身隊造兵廠
16	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	仙台機関庫炭水手	挺身隊員
17	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	鉄道局機関区員	挺身隊員
18	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員	挺身隊員
19	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	教員	挺身隊員
20	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業	無職	挺身隊員
21	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	造花商	挺身隊員
22	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	官吏	挺身隊員

23	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		帝国地方行政学会社員	挺身隊員
24	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東二番丁小学校卒業		公吏	挺身隊員
25	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		大工職	挺身隊員
26	昭和14年4月10日		昭和14年3月	北五番丁小学校高等科一年修了		農業	挺身隊員
27	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		会社員	挺身隊員
28	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		履物商	挺身隊員
29	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業		鉄道官吏	挺身隊員
30	昭和14年4月10日		昭和14年3月	向山小学校卒業		無職	挺身隊員 三月入隊
31	昭和14年4月10日		昭和14年3月	男師附属小学校卒業		官吏	本校英文科入学
32						通信省官吏	本校英文科入学
33	昭和14年4月10日		昭和14年3月	宮師附属小学校卒業		官吏	本校音楽科入学
34	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東京市立第三荏原小学校卒業		牧師	本校音楽科入学
35	昭和17年5月10日			上海居留民團立日本高等女学校		会社員(土族)	本校家政科入学
35	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		公吏	本校家政科入学
37	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		並炭商	本校家政科入学
38	昭和14年4月10日		昭和14年3月	志津川小学校卒業		農	本校家政科入学
39	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業		麵類商	本校家政科入学
40	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業		菓劑師	本校家政科入学
41	昭和14年4月10日		昭和14年3月	木町通小学校卒業		医療器械商	本校家政科入学
42	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		司法書士	本校家政科入学
43	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		官吏	本校国文科入学
44	昭和14年4月10日		昭和14年3月	荒町小学校卒業		河北新報社員	本校専攻科音楽科入学
45	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		画家	本校専攻部家政科入学

46	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業	米穀商	本校専攻部家政科入学
47	昭和14年4月10日		昭和14年3月	槻木小学校卒業	新聞取扱	本校専攻部家政科入学
48	昭和14年4月10日		昭和14年3月	荒町小学校卒業	文房具商	本校専攻部家政科入学
49	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員	本校専攻部家政科入学
50	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	官吏	本校体操科助教
51	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員/兄	宮城音楽科
52	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	荒町小学校卒業	商店員	宮城家政科
53	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員	宮城英文科
54	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	向山小学校卒業	会社員	宮城家政科
55	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員	宮城家政科
56	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	木町通小学校卒業	家具製作販売	宮城家政科
57	昭和17年1月10日	昭和19年3月8日		日出高女ヨリ第三学年ニ転入	会社員	宮城家政科
58	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	官吏	宮城家政科
59	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	木町通小学校卒業	物品販売	宮城家政科
60	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	無職	宮城家政科
61	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	和渕小学校卒業	材木商	宮城家政科入学
62	昭和18年4月1日	昭和19年3月8日			日本勧銀宮城支店	宮城国文科
63	昭和15年9月2日	昭和19年3月8日		遣愛女学校ヨリ第二学年ニ転入	貿易商	東京興健女専
64	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	牛豚肉商	東北女子職業学校
65	昭和15年4月8日	昭和19年3月8日		岡山県第一岡山高女ヨリ第二学年ニ転入	牧師	宮城女子専門学校
66	昭和18年4月1日	昭和19年3月8日			無職	女子師範
67	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	官吏	東北女子職業学校
68	昭和14年4月10日		昭和14年3月	塩釜第三小学校卒業	養理業	県立保健婦学校入学

69	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	商業		松操学校入学
70	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員		東京青山学院
71	昭和14年4月10日		昭和14年3月	南材木町小学校卒業	無職		東北女子職業学校入学
72	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	貸室業		宮城女子専門学校
73	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	立町小学校卒業	会社員		家事手傳
74	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業	呉服商		
75	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	田尻小学校高等一年修了	無職		家にて農事手伝
76	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東小野田小学校卒業	農		病氣
77	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	質屋営業		
78	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	菓子商		
79	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	多賀城小学校高等一年修了	官吏		病氣
80	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業	会社員		
81	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	榴岡小学校卒業	竹細工商		萱場製作所
82	昭和14年4月10日		昭和14年3月	六郷小学校高等一年修了	公吏		
83	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員		
84	昭和13年4月8日	昭和19年3月8日	昭和13年3月	荒町小学校卒業	建築設計請負業		病氣
85	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	教員		家庭 家事手伝
86	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	縮商		
87	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員		
88	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	教員		
89	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	無職		
90	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	貸家業		
91							第四学年次成績のみ記入有

92	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	官吏	
----	------------	--	---------	-----------	----	--

※「学籍簿」原本は、あいうえお順に綴じられているが、個人の特定を避けるために「卒業後の状況」(挺身隊造兵廠→挺身隊員→本校専攻科進学→他校進学→その他)順に並び変えた。本年報で紹介するデータは、入学年月日・卒業年月日・入学前の学歴・親の職業・卒業後の状況とし、個人を特定できるような情報は掲載しない。

2. 入学 一出身小学校一

『宮城学院七十年史』（1956 年 8 月刊行、30 頁）によると、創立以来、一学級分の生徒しか募集しなかった本校が、1939（昭和 14）年の新入生からはじめて二学級分（100 名）を募集することになった²。入学年月日は昭和 14 年 4 月 10 日である。入学年月日の記載がある生徒は、学籍簿在籍生徒数 92 名中 81 名で、その出身小学校を示したのが表 3 である。

表3 出身小学校とその人数

出身小学校	人数(名)	出身小学校	人数(名)
連坊小路小学校	13	大谷小学校	1
片平丁小学校	11	女川小学校	1
上杉山通小学校	9	志津川小学校	1
榴岡(榴ヶ岡)小学校	9	槻木小学校	1
東二番丁小学校	5	和渕小学校	1
東六番丁小学校	4	塩釜第三小学校	1
立町小学校	4	東小野田小学校	1
荒町小学校	3	田尻小学校(高等科一年修了)	1
木町通小学校	3	多賀城小学校(高等科一年修了)	1
向山小学校	2	六郷小学校(高等科一年修了)	1
原町小学校	1	仙台市外小学校	10
南材木小学校	1	第三荏原小学校(東京)	1
男子師附学校附属小学校	1	県外	1
宮城師附学校附属小学校	1		
北五番丁小学校(高等科一年修了)	3		
仙台市内小学校	70		

それ以外の 11 名はというと、前年度入学者 1 名、他校よりの転入学者 7 名（昭和 15 年度以降）、残り 3 名については入学年月日欄が空白のままであった。

入学者 81 名について表 1 からわかることとして、仙台市内の小学校出身者が圧倒的に多く、86%（81 名中 70 名）であった。仙台市外の地域としては、黒川郡（大谷小）、牡鹿郡（女川小）、本吉郡（志津川小）、柴田郡（槻木小）、桃生郡（和渕小）、塩釜市（塩釜第三小）、加美郡（東小野田小）、遠田郡（田尻小）、宮城郡（多賀城小）、名取郡（六郷小）

² 『河北新報』宮城女学校生徒募集広告によると、昭和 15 年度高等女学部生徒募集人数は 80 名（1940 年 2 月）、昭和 16 年度募集人数は 150 名（1941 年 2 月）、昭和 17 年度募集人数は 200 名（申請中）（1942 年 2 月）であった。『七十年史』（30 頁）に昭和 14 年 100 名の募集とあるが、『河北新報』の昭和 15 年募集人数が 80 名であったことから、「100 名」は「80 名」の可能性もある。

であった。特に、牡鹿郡（女川小）、本吉郡（志津川小）、桃生郡（和湊小）、加美郡（東小野田小）、遠田郡（田尻小）出身者は、「学籍簿」から、保証人方に下宿をして本校へ通っていたことがわかった。

発見された五冊の学籍簿で、各出身小学校の割合や出身小学校の地域を比較するのも意義あることだと思う。今後取り組みたい。

3. 宮城女学校への視察 ―聖書の授業が正課から課外へ―

1939（昭和14）年、生徒たちが入学して二ヶ月が過ぎようとしていた頃、宮城県に文部省の視察官が訪れた。その二日後、宮城女学校に来校したことが『天にみ栄え』（1987年3月刊行、558頁-559頁）に、校長クリーテの1939年6月18日付書簡（原文は英語）を引用して詳しく記されている。

文部省の視察官が仙台に来た。全国を十二地区に分け、定例の視察を行う他に、年に一度各地区をまわる視察団をつくった。仙台では今回が初めてである。県下の女学校の全校長が県立第一女学校に集められたところへ、八人の政府側の視察官と三、四人の県側の教育関係者が来た。その中の一人は軍人で、最近まで地方連隊にいた人である。開会の挨拶の中で、学校の教育に国民精神の動員が欠けていると指摘した。また五月二十二日に天皇が中学生の軍事教練を親閲し、その際勅語（「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」）を賜わった事実に言及した。また、荒木文相の、教育についての十四ヶ條を詳しくのべ、教育に政府が重点をおいていることを強調した。そして我が校には二日後に視察団が来ることを予告した。三人の視察官が来校した時、私たちは英語で礼拝をしていた。礼拝後彼等は教育の方針について質問し、学則、教案を検討した後、授業を見学した。（中略）彼等の批評の要旨は次の通りであった。この学校は二つの教育目標を追っていること、一つは聖書の教えとキリスト教であり、もう一つは国民精神である。第一の方は徹底しており、音楽を通してそれが浸透している、それにくらべれば第二の方は薄いように思われる。この二つの目的をもっと調和させてほしいということであった。また国の祝日のもち方について、讃美歌、聖書朗読、祈祷という形をやめて、今後は国歌と教育勅語と適切な講話で式を挙げた方がよいと忠告を受けた。（中略）また彼等は当校で天皇の写真（御真影）を県に請求したかどうか尋ねた。「していないと答えて、問題はそのままになっているが、この問題は又再提起されるだろう。」

『橄欖』二十一号（1940年2月発行）「校報欄―学校日誌―」³の6月8日の項に、「督学官来校、視察セラル」と記されていることから、クリーテ書簡にある、「我が校には二日後に視察団が来る」日とは、6月8日のことで、文部省派遣の視察官というのは、正式

には「督学官」であった。そして、仙台に視察団が来たのは6月6日と言えよう。

『天にみ栄え』(560頁)に、翌1940年6月に県の教育長が来校し、一年前の追加調査が行われたとある。教育長から、朝の礼拝には宮城遥拝と国歌斉唱をしているかという質問があり、国の祝日にはしているが毎朝はしていないとクリーテは答えた。さらに、7月23日には、東北学院、宮城女学校、バプテスト派の学校(尚絅女学校)の代表者が県庁に呼ばれ、カトリックの学校(仙台高等女学校)も陪席させられ、提言がなされ、実行を要請されたことも記されている。

1939年6月の教育状況総合視察後、県が「ミッションスクール」の校長を集め、どのような対応を行ったかを文部省に報告した文書が、国立公文書館に保存されている。同文書によれば、この「関係学校長会議」の日付は7月26日(『天にみ栄え』では、7月23日)となっている。この文書は、宮城女学校だけでなく、他の二校(東北学院・尚絅女学校)にとっても、戦時中のミッションスクールとしての対応を知る貴重な文書であるので、全文を翻刻し示す(資料1)。

文書の前文部分に注目すると、「懇談的ニ指示致シ、何レモ了承、直チニ実行ニ移スコトニ決定相成」とあるが、学校側としては「何レモ了承」しかとる道はなかったのであろう。三校の学校長らは、「関係学校長会議」の内容をそれぞれの学校に持ち帰り、学校としての今後の方針を話し合ったことであろう。その結果として、宮城女学校は、1941年4月から聖書の授業が正式に課外科目へとになっていくのである。この学年の学籍簿に見られる聖書成績欄は、まさにこの決定を反映したものとなっている。さらに、「二、具体的方法1礼拝ニツイテ」の項目で、「礼拝ヲ行ヒ、讃美歌等ヲ歌フ場合ハ必ズ宮城遥拝、君ヶ代奉唱等ヲ先ニ実施」という指摘に対し、1941年3月の第49回卒業式で、まさにその通りに今までの式次第が変更された(写真3)。そして、「二、具体的方法3奉安殿ニツイテ」の項目での、「必ズ近キ将来ニ於テ御真影ヲ拝戴シ、且成ル可ク早く奉安殿ヲ設ケ」の指摘に対しても、その準備が始められた(写真4)。ただし、奉安殿の完成は1942年2月であった。

また、1900(明治33)年の一年制特別聖書科に始まり、多くの婦人伝道者を世に送り出した聖書専攻科は1941年3月をもって廃止された。『天にみ栄え』(570頁)によると、聖書専攻科は、次第に在籍者数を減じ、ついには卒業生のない年さえあり、このことも廃止の一因となったとのことである。

創立以来、合衆国改革派教会の援助を受け、キリスト教主義女子教育を行ってきた本校にとって、この時代、学校を守るために難しい選択を重ねなければならなかったのである。

³ 『橄欖』本年報35頁～63頁で紹介する。文学的な内容を掲載した冊子として刊行後、1940(昭和15)年5月～1944(昭和19)年3月まで、毎月一回、見開きB4版4頁の体裁を原則とした学内広報。

学秘二二二一一号

昭和十五年八月二日

宮城県知事(角印「宮城県知事印」)

文部省普通学務局長殿

管下所謂「ミッシヨンスクール」監督ニ関スル件

昨年六月貴省ニ於テ本県下教育状況綜合視察ノ際ノ御指示モ有之所謂「ミッシヨンスクール」ノ教育刷新ニ関シテハ鋭意検討研究致居候処過般各關係学校長ヲ召集シ左記事項懇談的ニ指示致シ何レモ了承直チニ実行ニ移スコトニ決定相成一般社会並父兄側ノ意嚮モ最モ時宜ニ即シ適當ナル方針並措置トシテ賛意ヲ表シ居ル模様ニ有之此段御参考迄及報告候

記

一、一般方針

教育目的ノ中心点ヲ「皇国民ノ鍊成」ニ置クベキヲ強調ス、而シテ宗教ノ為ノ教育ニアラズシテ皇国民ノ教育ノ為ノ宗教的手段タルヲ明カニスルコト

二、具体的方法

1 礼拝ニツイテ

礼拝ヲ行ヒ、讚美歌等ヲ歌フ場合ハ必ズ宮城遙拝、君ケ代奉唱等ヲ先ニ実施シ国民精神ノ涵養ニ資セシムルコト

2 聖書教育ニツイテ

(イ)修身科ニ於テハ専ラ国民道徳ノ要旨ヲ教ヘ聖書ハ別ニ時間ヲ設ケテ教授スルコト

(ロ)聖書教授ハ必ズ課外ニ於テナスコト

3 奉安殿ニツイテ

必ズ近キ将来ニ於テ御真影ヲ拝戴シ且成ル可ク早く奉安殿ヲ設ケ学校教育ノ中心タラシムルコト

4 諸行事ニツイテ

正課ニ於テモ課外ニ於テモ教育ノ諸行事並諸施設ハ凡テ皇国ノ道ニ帰一スルノ精神ヲ以テ取り扱フコトニ努ムルコト

5 東北学院ニ於テ其ノ財団法人東北学院寄附行為ノ條章中第二章(目的及事業)第三

條ノ二「本財団ノ目的ハ、一、基督教主義ニ従ヒ完全ナル普通教育ヲ施スニアリ、二、

聖書ニ含メル基督教ニ基キ徳育ヲ施スニアリ、三、将来基督教教師タラントスル者或
ハ其他ノ職業ニ従事セントスル者ニ充分ナル高等教育ヲ施スニアリ」第四條ノ二「東
北学院及東北学院中学部ハ教育ニ関スル 勅語ノ聖旨ヲ奉体シテ教育ヲ施スモノト
ストアリ、我カ国教育ノ根本カ教育勅語ノ聖旨奉戴ニ基ク觀念ヲ輕視スルノ觀アル
ヲ以テ、第二章第三條ノ第一号ニ現行第四條ノ一ノ規定ノ趣旨ヲ掲ケ第四條ノ二ハ削
除スルコト

三、関係学校長会議

七月二十六日 於県庁学務部長室

出席者

出村東北学院長、クリーテ宮城女学校長

高橋尚綱女学校長、

外ニ仙台高等女学校長ヲモ便宜参会セシメタリ

(旧字体は新字体になおし、読点を適宜補った)

第四十八回 卒業式記事	
昭和十五年三月三十日 午前十時舉行	
式 順 序	
「前奏曲」リトス作	岡 不二枝
一、讚美歌(三五七番)	伊藤 久子
二、祈 禱	館 岡 剛
三、國歌齊唱	一 見 部 長
四、勅語捧讀	一 見 部 長
五、卒業證書授與及告辭	クリーテ校長
皇帝行進曲 ワクナー作	高野 禮子
六、賞狀賞品授與	一 見 よし子
愛國婦人會宮城縣支部長	宮城縣知事
大日本聯合婦人會宮城縣支部長	宮城女學校家庭會々長
宮城女學校家庭會々長	宮城女學校長
七、ピアノ獨奏	登坂 ミハル
練習曲作品二十五の七 ショパン作	
八、宮城縣知事告辭	
九、仙臺市長祝辭	
一〇、宮城女學校家庭會會長祝辭	
一一、答 辭	高等女學部卒業生總代 船越 アイ 専攻部卒業生總代 丹波 セツ 以上

第四十九回卒業式順序	
(昭和十六年三月十七日午前十時)	
「前奏曲」ヘンデル禮讚 モーシモレス	
一、宮城道拜	修 禮
二、國歌齊唱	一 同 同
三、勅語奉讀	一 見校長事務取扱
四、讚美歌 三五七番	一 同 同
五、祈 禱	丸 山 教 員
六、卒業證書授與及告辭	一 見校長事務取扱
七、賞狀、賞品授與	宮城縣知事
愛國婦人會宮城縣支部長	大日本聯合婦人會長
宮城女學校家庭會長	宮城女學校
八、ピアノ獨奏	協奏曲第四番 ベートーヴェン
音樂科卒業生	勝 本 稔 子
伴 奏	一 見 教 員
九、宮城縣知事告辭	
一〇、仙臺市長祝辭	
一一、宮城女學校家庭會會長祝辭	
獨唱 音樂科卒業生 小宮 三千代	
汝イエスラエルに開け メンデルスゾーン	
一二、答 辭	高等女學部卒業生總代 石 田 洋 子 専攻部卒業生總代 泉 さちこ
「後奏曲」レザンより抜萃	

写真3 卒業式記事

上段：第四十八回卒業式 昭和十五年三月三十日(『橄欖』第1号 1940年5月)

下段：第四十九回卒業式 昭和十六年三月十七日(『橄欖』第20号 1941年4月)

學 校 日 誌	
六 日	合同職員會、報國園結婚成増産運動、宮城外苑整備事業奉仕等につき協議す
七 日	合同禮拜、メソヂスト教會森田牧師の説教ありたり。
八 日	文部省森長博氏新學年入學試験状況取調のため來校せらる。
十 日	校外調育協議會宮城圖書館に於て開催大越先生出席せらる。
十二 日	増産園藝指導として遠藤中吉先生を依頼、本日より校内外各地に園藝地の設備に着手せり。
十三 日	校友會及女子青年會を解散し宮城女學校報國園を組織する旨生徒一同に報告す。
十九 日	仙臺鐵道局主催交通道徳懇談會を商業會議所に開催大越先生出席せり。
二十 日	奉安殿御造營工事につき石井組仙臺代表河合氏と家庭會委員會合し懇談せり。
廿二 日	青少年に賜りたる勸誘御下賜二周年記念奉禮式を行ふ。
	昇天祭、クリーテ先生説教あり普學賞（登坂ときわ）シエキスピア賞（松隈ツネ子）の授與式を行

【 3 】 號 九 十 第		校學女城宮 櫓 檣	日五十月四年七十和明
		學 校 日 誌	今後の日本國民を教育する方がはたし、東亞の民を愛し、歐米諸國に覺醒を促し、新しき約を見せしむるそれでは日本人自身の精神教養を層一層高め深めなければならぬ。實は教養ある日本の紳士淑女によつてのみ斯る目的が完遂されると信ずる。茲に教育の重要性が痛感されます。
二月十一 日	追繼に於ける報國祭に生徒一同參加		
十四 日	全校生徒耐寒遠足午前七時半集合福田町にて下車徒歩博金神社參拜		
十六 日	シンガポール陥落祝賀式御造營中なりし奉安殿竣工式舉行		
十八 日	戰捷第一次祝賀式		
三月五 日	午後五時より家庭會理事會開催		
六 日	地久節學式、後女學部卒業生謝恩會		
十二 日	第二次戰捷祝賀式		
十六 日	第三期終業式並に一見、原田、丸山、金子、野村五先生の送別式		
十七 日	午前十時より高女部第五十回卒業式舉行		
十九 日	專攻部入學考査		
二十二 日	午前九時より高女部第一學		

写真4 奉安殿の建設

上段：奉安殿造營工事に関して 五月二十日（『櫓檣』第14号 1941年6月）
下段：奉安殿竣工式挙行 二月十六日（『櫓檣』第19号 1942年4月）

4. 第五学年次の成績表 一英語の授業が選択科目へ 軍事教練科目の出現一

次に、第五学年次成績表欄に注目する。写真1・2を見ると、本来第五学年次の成績を記入するはずの欄が空欄とされ、予備に置かれた欄が第五学年次の成績記入欄となっている。そして、空欄とされた本来の第五学年次成績記入欄には、第一学年次から第四学年次までには見られなかった科目名や複数あった科目を一つにまとめた記号があり、その評点が、予備に置かれた第五学年次欄に記入されている。第五学年次成績欄の主な変更点を以下に示す。

1. 第四学年次までは2～3科目ある国語科目が、第五学年次では1科目にまとめられる
2. 第四学年次までは2～4科目ある英語科目が、第五学年次では1科目となり、さらに被服科目との選択制になっている
3. 武道教練（体・武・教）という科目が全員に新設される
4. 理科が物象と生物の2科目となる

上記、第2項目については『宮城学院七十年史』、第3項目については『宮城学院八十

年小誌』『橄欖』にその状況等が掲載されていたので、それぞれ以下に記す。第1・第4項目について、関連資料を見出すことはできなかった。

『宮城学院七十年史』によると、昭和14年度入学生が四学年に進級した1942（昭和17）年8月8日、宮城県中等学校長会議で英語を随意科目とすることが決議された（ただし、高等女学校のみ）のを受けて、本校は次年度（五学年）から英語を選択科目とし、英語か裁縫のいずれかを選択させることとした。選択者の内訳は、学籍簿92名中、英語科目選択者49名、被服科目選択者38名、空欄5名であった。

『宮城学院八十年小誌』（1966年10月刊行、55頁）に、1943（昭和18）年4月から軍事教練が正課となったことが記されている。本校の軍事教練の内容については『橄欖』第21号（昭和18年3月13日発行）に掲載されていた。それによれば、前年の11月16日、県立第一中学校教官（いわゆる「配属将校」）都築大尉を招き、その後十日間にわたり各個教練、閲兵、分列行進が行われた。東北地方最初の女学生軍事教練実施なのだろう。春からは、帰還中尉諸根武雄の指導の下に、毎週月曜の朝30分実施、また、薙刀講習会、弓道寒稽古なども実施されたようである。

さらに、この年、「中等学校令」の改定により、本校は、これまでの各種学校のまま存続するわけにはいかなかった。校名を「宮城女学校」から「宮城高等女学校」と改称し、宮城県の高女学校学則をほとんど逐条そのまま採用した新学則で、定員千名・四学年制・五学級編成へと改められた。

キリスト教主義に基づく教育を行ってきた宮城女学校は、これまでその設立目的に従い、各種学校として独自の教育を行ってきた。しかし、1941年4月に聖書の授業を正課から外したことで、各種学校にとどまる意味はなくなっていた。そこに、高等女学校に改めるか廃校にするかの選択が迫られたことになったのである。「中等学校令」のもと、本校の「寄附行為」条文中から「基督教ノ精神ニ基キ品性ヲ涵養スル」が削除されたのは、学校存続を図るためのやむを得ざる措置であったということになる。

5. 卒業後の進路について

1939（昭和14）年に入学し、国の政策により本校の教育内容が大きく変化した中で五年間の学校生活を送った生徒たちが、卒業後に進もうとした道はいかなるものであったのだろうか。学籍簿の「卒業後の状況」を表4に、またその中で最も多かった「本校専攻科進学者内訳」を表5に示した。

表4②「挺身隊造兵廠」・③「挺身隊」については次章で説明することとし、ここでは、先ず、表4に示した①「本校専攻科進学」の内訳から見ることにする。

前章でも述べたように、本校は、1943（昭和18）年、宮城女学校から「宮城高等女学校」

へと改編・改称された。それに伴い、専攻部も「専攻科」へと改称され、従来の家政科・英文科・音楽科に加え、「国語科」が新設された。生徒たちが五学年次の時である。『橄欖』22号（昭和18年7月10日発行）には、4月5日に行われた入学式の記事があり、専攻科入学者数は、家政科56名、国文（国語）科31名、英文科4名、音楽科7名であった⁴。さらに、『橄欖』23号（昭和19年3月25日発行）では、表5にある「本校専攻科進学者」らが含まれる「1944（昭和19）年度入学試験状況」の記事があり、専攻科合格者数は、家政科60名、国文（国語）科40名、英文科12名、音楽科20名であった。

1943年度、1944年度の専攻科入学者数を見てみると、家政科が圧倒的人気で、次が国語科である。しかし、表5の「本校専攻科進学者内訳」数は、家政科への進学者は21名と多いが、国語科への進学者が2名であるのは驚きである。すなわち、国語科には他校からの進学者が多かったということになる。

本学学芸学部人間学科大平聡教授によると、「本校の専攻科、特に英語科は、多くの卒業生を教員として送り出してきた。英語科目の選択制により、英語教員の需要減が見込まれる。そこで本校が起死回生を図ったのが、国語専攻科を新設し、国語教員を養成することであった。しかし、本学からの進学者が2名というのは驚きである。本校は、そのため、学校工場を開き、専攻科生をそこで勤労させながら、教員採用試験の準備をさせようとした。その努力により、国語専攻科は、1946年に中等教員無試験検定資格が許可された」とのことであった。出身女学校にかかわらず、国語専攻科入学生たちに教員採用試験を合格させ、無試験検定資格を得ることで専攻科の存続意義を確保したいということだったのであろう。

また、国語科の中等教員無試験検定資格取得について、『天にみ栄え』（575頁）に次のように記されている。

表4 「卒業後の状況」

	卒業後の状況	人数(名)
①	本校専攻科進学	32
②	挺身隊造兵廠	15
③	挺身隊	15
④	他校進学	10
⑤	その他	20
計		92

表5 「本校専攻科進学者内訳」

	専攻科	人数(名)
①	家政科	21
②	音楽科	5
③	英文科	3
④	国文科	2
⑤	体育助手	1
計		32

⁴ 「国語科」の表記が、「国文国文（国語）科」とあるが資料のままとした。正式には「国語科」である。

⁵ 旧学校名については、各学校のホームページ「沿革」にて確認した。宮城県女子専門学校は、通称「宮

こうした非常事態の中で、新設の国語専攻科は翌春の初卒業にあたり、ぜひとも文部省の中等教員無試験検定資格をとるべく猛勉強を積み重ねた。他学科もこれに協力し、教室や時間割に大幅な便宜を提供したりした。九月二十日の文部省検定委員来校に当り、その実力を示すべき小論文を提出したが、学徒動員に続く戦災下にあつて示された実力は立派なものであった。翌年五月七日の事であったが、無試験検定が許可された。

「学籍簿」と直接関係はないが、本学の歴史で大切な部分であるこの時期の専攻科の歩みを、整理しておこう。

年月	事柄
1943(昭和18)年4月	従来の家政科・英文科・音楽科に「国語科」が新設され、名称が「専攻部」から「専攻科」となる
1944(昭和19)年5月	専攻科教科修練過程改正許可、家政科が育児科、英文科は外国語科となり国語科・音楽科の四科併設設置、中等学校教員養成に適する課程を履修する
1946(昭和21)年5月 6月	国語科に中等教員無試験検定許可される 専門学校令によって宮城学院女子専門学校の設置が許可される (育児科・国語科・外国(英)語科・音楽科)

ちなみに、1946(昭和21)年3月、宮城高等女学校国語専攻科を卒業した生徒は、「国語専攻科第一回生」と呼ばれる。しかし、同年6月の専門学校令により、本校専攻科は「宮城学院女子専門学校」となったため、1947(昭和22)年3月に卒業した生徒は、「宮城学院女子専門学校国語科第一回生」と呼ばれた。つまり、「宮城高等女学校国語専攻科卒業生」は、この一年度しか存在しないこととなったのである。

次に表4④の「他校進学」10名の内訳を見ると、東北女子職業学校(現・東北生活文化大学)3名、宮城県女子専門学校2名、興健女子専門学校(現・聖路加国際大学)1名、宮城県女子師範学校(現・宮城教育大学)1名、県立保健婦学校1名、松操学校(現・仙台大学)1名、青山学院1名であった⁵。

最後に表4⑤の「その他」20名の内訳を見る。病気3名、就職(萱場製作所)1名、家

城女専」と呼ばれ、1921(大正10)年に開設された宮城県第二高等女学校の高等科を前身として、1926(大正15)年に創立される。戦後の学制改革により、東北大学に包摂されたのち、1951(昭和26)年廃止となる(『宮城県女子専門学校史』、1986年発行)。県立保健婦学校については、確認することはできなかった。

⁶ 大平聡「挺身隊覚書」(『仙台市史のしおり』Vol.27、仙台市史編さん委員会、2009年)

事手伝い2名、農事手伝い1名、記載なし13名であった。当時、家事手伝い・農事手伝いをする女子は、家庭の中心的働き手とされ、それぞれ「家庭ノ根軸タル者」及び「農業要員タル女子」と呼ばれ、挺身隊の対象から除かれることとなる⁶。

6. 学校挺身隊

最後に表4にみえる①「挺身隊造兵廠」・②「挺身隊」の記述について考える。本学院では、2000年度から、大平教授が中心となり、戦災で原資料の多くが不明になってしまった本学の戦時下の状況について調査研究が開始された。その年の大学祭で同窓会主催の「戦時下の宮城学院展」が開催された。翌2001年度の大学祭では資料室主催として、そして2002年11月に大学学芸員課程と資料室が協力し、さくら野百貨店仙台店と、計3回にわたり「戦時下の宮城学院展」は開催された。また、学徒勤労動員、当時の学校教育、戦争を経験した方々の証言を聴き取る調査も精力的に行われた⁷。

この度、この一連の調査研究にあたられた大平教授に宮城女学校の「学校挺身隊」の発見経緯を教えていただいた。

- ① 2002年、本校卒業生 今野照子（故人）さんから提供された昭和19年の日記（個人日記）に、1月18日に本校で挺身隊出陣式があった記述を発見した。
- ② 同窓会に依頼し、挺身隊体験者を探していただき、宮城美恵子（故人）さん、ほかお二人の方と連絡が取れる。
- ③ 大学祭行事の一環として、公開の聴き取り調査を行う。仙台放送が「戦時下の宮城学院展」準備状況を継続取材していた関係で、この時の司会は、佐藤拓郎アナウンサーに担当していただいた（「さくら野展」、直前のこと）。
- ④ 急遽、「挺身隊」を「さくら野展」の一章に加える。

これらの調査をまとめた『戦時下の宮城学院』、『戦時下女学校の学徒勤労動員』の二冊は、本学だけでなく「宮城県内の女学校についての戦争」を検証する貴重な資料となっている。『戦時下女学校の学徒勤労動員』6頁より、「女子挺身隊と学校挺身隊」の部分を以下に示す。

女子挺身隊と学校挺身隊

1941（昭和16）年頃から、14歳～25歳（戦争末期には40歳まで引き上げられる）の未就学、未就職の未婚女性を軍需工場などへ動員させるという女子挺身隊が組織された。既婚女性、農業従事の女性は免除された。しかし、強制ではなく希望者だったため、参加は低調だった。1943（昭和18）年12月、政府は、翌年春の卒業生を女子

⁷ 2002年度「戦時下の宮城学院展」の記録、挺身隊に参加された三人の方への聴き取り調査の記録等は、『資料室年報』第9号（2003年5月、73頁-142頁）に紹介されている。

挺身隊として、学校長のもとに編成するよう指示を出した。この女子挺身隊のことを、従来の女子挺身隊と区別し、ここでは「学校挺身隊」と呼ぶことにする。

宮城県の多くの高等女学校で学校挺身隊が組織され（全校かどうか未調査）、3月7日に卒業式を行い、その直後の10日及び12日の2隊に分かれ、動員が実施された。だがこの学校挺身隊への参加も強制ではない上、両親からの反対にあって諦める生徒もあり、後述の学徒勤労働員ほど徹底したものではなかった。例えば宮城高女の参加者は、卒業生89名中16名である。

ほとんどの学校が、卒業後に学校挺身隊を組織したのに対し、宮城高女だけは事情が異なっていた。他校に先駆け、1月18日に学校で壮行式を行い、在学したまま、翌19日、東京第一陸軍造兵廠仙台製造所（通称・原町陸軍造兵廠）に動員されている。そして3月の卒業式には、一時学校へ戻って式に参列している。2ヶ月早い動員の理由は定かではないが、聞き取り調査によると、宮城高女は、当時宮城県で唯一の5年制の女学校だったので（昭和16年度入学者から4年制へ完全移行）、実務へ就くのが他校より遅かった。そういう負い目から、学校は参加を早めたのではないかということだった。動員先は、多くが県内の軍施設であるが、民間工場である日本電気（仙台市長町）に動員された岩沼高女（現・名取高）のような事例もある。

当時、実際に挺身隊へ参加した三人（宮城さん、ほか二人）から話を伺った大平教授によると、宮城さん達は、1月に学校挺身隊として原町陸軍造兵廠へ行き、この時一緒に行った宮城高女の生徒は16名だったという。参加者の集合写真も提供された（写真5）。この聞き取り調査の結果、「本校から学校挺身隊に参加したのは、16名である」という結論に至ったとのことである。

聞き取り調査に協力していただいた三人の学籍簿を見たところ、「卒業後の状況欄」には、「挺身隊造兵廠」と書かれてあり、パターンAのクラスであったことが確認できた。学籍簿に「挺身隊造兵廠」と記載があるのは15名で、この15名が、上記の1月に本校から結成された「学校挺身隊」16名であると思われる。ただし、証言および集合写真と、学籍簿の記載の間には1名の差がある。

しかし、今回の「学籍簿」の調査により、1月に「学校挺身隊」として参加した人数はもう15人いたことが明らかとなった。もう一方のクラス（パターンB）に所属し、「卒業後の状況欄」に「挺身隊員」との記載がある15人である。「学籍簿」を調査した当初は、こちらの「挺身隊員」と記載のある15名は、3月の卒業式後に「学校挺身隊」として組織されたのだと考えた。すなわち参加した時期の違いによって、1月参加者を「挺身隊造兵廠」、3月参加者を「挺身隊員」と書き分けたのではないかと推測した。しかし、この書き分け方は、本稿第三章で述べた通り、担任による書き方の違いであったことがわかった。さらに、学籍簿No.30の生徒の「卒業後の状況欄」に注目したい。そこには、わざわざ



写真5 学校挺身隊壮行式 1944年1月18日(宮城美恵子さんご提供)

ざ「挺身隊三月入隊」とある。あえて、「三月」と入隊月を明記していることは、この生徒だけが違った時期の入隊であったことを示しているのであろう。これらのことから、学籍簿の「卒業後の状況欄」にある「挺身隊造兵廠」15名、「学校挺身隊」15名は、3月に入隊した1名を除く29名が、本校から1月に「学校挺身隊」として出動したものと考えざるを得ない。さらに、この時の「入隊者」の集合写真として掲載されてきた宮城さんご提供の写真は一クラス分(パターンA)のものであり、もう一クラス分(パターンB)の集合写真が別に存在するものと推測される。これまで、16名(証言)、20名(今野照子さん日記)、25名(『橄欖』23号)と伝えられてきた宮城高等女学校の学校挺身隊は30名と考えなおさなければならないという結論に至る。

おわりに

前章で、『橄欖』23号(1944年3月25日発行)には挺身隊参加者が25名であったと述べた。23号は、終刊号であり、彼女たち(1943年度生)の卒業後に発行された。その頁数は16頁にも及んだが、1月18日に行われた挺身隊壮行式の記事は、驚くほど小さかった。その記事と「編輯後記」(一部抜粋)を最後に紹介する。

・～各科だより(女学校)～ 一部抜粋

市内各女学校の囁失として五年の挺身隊員二十五名が去る一月十八日原町^{原文ママ}○○○へ発った。午後一時その壮行式を大講堂で行ふ。校長先生から慈愛にみちた激励の辞に答へて隊員代表の力強い誓言があり、次いで「海行かば」の合唱を以て式を終へた。式直後直ちに戦意昂揚愛国歌合唱祭が開かれた。女学部は各学年に、専攻科は音楽科と他の科とに分かれ、それぞれ力一杯に米英撃滅の血を湧きたたせながら歌ふ。合唱祭終るやはやくも原町からお迎へのトラックが来る。在校生達の「萬歳」に送られつつ搭乗した隊員達は一路戦場へ。二十一日、校長先生、島先生が隊員の激励かたがた工場を見学しておいでになる。「みんな張り切って心から愉しさうです」のお言葉に、下級生達は皆出勤の許される日待つことしきりである。

・～編輯後記より～ 一部抜粋

本号の原稿はすでに十一月に集つてゐたが、いろいろな理由で今日に至った。その間情勢は随分と変化した。だからもっともと載せたいものの訴へたいものがたくさんあった。たとへば本科女子挺身隊結成のことなどである。この記事はもっと大きく特輯したかったのだが、今は是非もない。・・・・・・・・・・・・・・・・(石井)

編集後記(石井昌光)から、挺身隊について大きく取り上げたかったという思いは伝わるが、23号で最も多く頁を割いた記事は、生徒たちの「農繁託児所の勤労日記」であった。慣れないながらも生徒たちが一生懸命、農村の子供たちを世話した様子が日記から伝わってくる。

『橄欖』23号を以て、本校に組織された「挺身隊」についての記事は、本校の歴史から消えてしまった。なぜ、消えてしまったのかについては、今のところ不明である。

「学籍簿」を通して、戦争が生徒たちの「学び舎」での日々にもどのように入り込んで来たのか、その一端を感じ取ることができた。本学資料室に残る戦争関連資料は、決して多くはない。だが、今回の「学籍簿」の調査を通し、埋もれている資料の存在を発見することができた。それにより、当時わからなかった事実を明らかにすることもできた。一つ一つを積み重ね、資料を通して検証することが資料室に課された役割であることを自覚し、今後も、「宮城学院の歴史」に、新たな1ページを加え続けることができるよう努力していきたい。

〈付記〉

宮城美恵子さんからご提供いただいた「挺身隊壮行式」の写真であるが、本稿では一クラス分（パターン A）のものであり、もう一クラス分（パターン B）の集合写真が別に存在するものと推測した。しかし、この写真がクラス単位での挺身隊参加者集合写真なのか、クラスに関係なく撮った写真なのか、今となってはもはや確認することはできない。

「宮城高等女学校挺身隊」やこの写真についてご存知の方がいらっしゃいましたら、資料室まで是非ご連絡ください。



宮城学院の植物たち その3 トチノキー

宮城学院女子大学 一般教育部教授 木村 春美

「宮城学院の植物たち」のシリーズ第3回は、宮城学院のプロムナードを飾るトチノキ並木（写真1）を取り上げます。日々来学する度に何気なく見上げている、あるいはそこに存在することを意識したことすらないかもしれないトチノキを巡る、取りとめのないお話です。

1. 並木、そして葉・樹皮・材木

世界的に有名な並木道と言えば、パリのシャンゼリゼ通りのマロニエ（西洋トチノキ）並木を思い浮かべる方が多いかもしれません。日本の大学の並木はというと北海道大学のポプラ並木でしょうか。そして、宮城学院はトチノキです。トチノキは北海道、本州、四国、そして九州でも見られる落葉広葉樹で、特に雪の多い東北や北陸などで馴染み深い大木です。山地の沢沿いで多く見かけられ、サワグルミ・カツラなどと共に溪谷林を形成し、大きいものは高さ35メートル直径4メートルにもなると言われています。街路樹としては、県木となっている栃木県の県庁から宇都宮市役所までの「シンボルロード」（通称）の並木があります。仙台市内では泉パークタウン寺岡など数カ所に並木があり、台原緑地近くの「とちのき公園」には1882年ごろに植林された多数のトチノキが年月を経て巨木となっています。石川県白山市にある「太田の大トチノキ」は、幹周りが13メートルにもなり天然記念物に指定されています。白山市の公式サイトによれば、樹齢約1,300年で国内最大とされていて、まさに森の巨人という表現がぴったりです。

実は、仙台に移り住んだばかりの頃は、ホオノキと区別が付きませんでした。どちらも大木で大きな葉、しかも同じくらいの枚数の葉が枝先に集まって付いているからです。しかし、葉のつき方と葉の特徴をよく観察するとその違いがわかると教えてもらいました。トチノキの葉（写真2手前&3）は、大きな掌状（手のひら型の形状）複葉で対生（2枚ずつ向い合って生える）、小葉5枚から7枚（時には9枚）で1枚の葉を形成します。小葉は15センチから40センチの長い楕円形で（中央の小葉が最も大きい）、縁はギザギザ



写真1 2021年5月10日撮影



写真 2 2021 年 11 月 11 日撮影



写真 3 2021 年 7 月 11 日撮影

しています。葉は厚みがなく、秋に黄色く色付いたあとの落葉時には、乾燥して縮こまったり端が丸まったりしてしまいます（写真 2 奥）。一方、ホオノキの葉は、1 枚 1 枚が独立した葉でやや厚くて硬く、葉の付け根が微妙にずれている互生（互い違いに生える）で、落葉してもその形を保ち存在感があります。この大きな葉は、料理を盛ったり包んだりするのに役立ち、風味も良いので、飛騨地方などの郷土料理には欠かせません。朴葉味噌、朴葉包み焼き、朴葉寿司などに重宝されてきました。朴葉味噌は、食材を味噌と共に葉に乗せて焼き、包み焼きは文字通り包んで焼きますが、どちらも燃えにくい葉の特性を活かした料理です。全国的には柿の葉寿司の方が知名度は高いでしょうが、大きな朴の葉で包んだ朴葉寿司も香り高い逸品です。ちなみに、ホオノキも宮城学院の敷地内に自生していて、こども園の園児たちが落ち葉でお面を作ったりして遊んでいるのを見かけます。

話を戻し、トチノキの樹皮は灰褐色で、小さな凹凸が多いため触るとザラザラしています。成長すると樹皮が剥がれ落ち、特徴的な波目模様が現れます。材木は、木目が美しく「絹のような」と形容されるほど光沢もあり、また軽軟で加工もしやすいため箱類、彫刻、漆器の木地、家具などに広く利用されています。材木の色は、黄白色～淡黄褐色と明るめです。大木になると凹凸やコブがありユニークな木目が出ることから、銘木として珍重されます。昔は、太い幹をくり抜いて臼を作っていたようですし、炭火に炙られても反り返ったり変形しにくいので、炬燵板に最適でした。現在でも一枚板としてテーブルに利用され、個性的な作品に仕上げられています。滋賀県でマンションのキッチンカウンターにトチノキの材木を使用するため伐採が進み、この状況に危機感を抱いた人たちが巨木を守る会を立ち上げて調査を行い、保全に向けた動きも起こりました。また、バイオリンの裏甲板にも使われてもいるようですが、これは「普及品に」という但し書き付きでした。

2. 冬芽・花・実

トチノキの冬芽は1～4センチですが、その芽鱗(芽を覆って保護するうろこ状の小片)が樹脂でベトベトしているので簡単に見分けられます。葉の落ちた後の葉痕は、ユニークな表情の顔に見えたりします。トチノキを含め、幼木の愛らしい葉痕を探しながら歩くのが冬の森歩きの楽しみにもなります。春から初夏にかけて15～25センチの円錐状の花序(花の集団)を上に向かって咲かせます。一つの花序に両性花(雄しべと雌しべの両方をもつ)と雄花(雄しべのみをもつ)が混じって咲いています。一花序当たりに、両性花は5個程度、その他の小花は全て雄花だそうです。ほのかな甘い香りを発散させて、ハチなどの訪花昆虫を誘い受粉を手伝ってもらいます。木々の背丈が高いので間近で実物の花を見たことはありませんが、この花などを蜜源とした宮学ハニーは、私たちの胃袋と心を満たしてくれています。

秋には3～5センチもある実(写真3&4右)が実ります。重さは20～30gもある重い実です。実は熟すと3つに裂け、中から顔を出す1～2個の種子は赤褐色で光沢があります。このトチの実は、縄文時代から食用にされてきました。飢饉の際の重要な救荒食物でもあったようです。とはいえ、苦味が強く、アク抜きをしないと食用にはなりません。以前、同窓会にお勤めされていた佐藤澄子さんが、「今年はたくさん実りましたから、栃餅にさ



写真4

栃餅 モチモチの木絵本 日本語版と英語版 栃の実

れてはいかがですか」と軽くおっしゃるので、実を拾い集めて調理方法を調べてみましたが、水に浸す、干す、表皮を剥く、繰り返しお湯をかけたあと冷ます、煮立てて灰を入れて冷ます、灰を追加してドロドロにして数日置く、薄皮を剥く、、、と、とてもとても私の手には負えないとあっさり諦めました。佐藤さん、白状します。ごめんなさい。(アク抜きの手順は他にも様々にあるようです。)でも、そうして作られた栃餅は深い深い味わいです。写真4左下の栃餅は山形県で買い求めました。三重県出身の私は、栃餅よりも栃の実煎餅の方が馴染みがあります。一昔前には、飛騨高山を訪れたときのお土産は、決まって歯が折れるかと思うほど固い栃の実煎餅でした。最近は、柔らかくてザラメをたっぷり練り込んだ薄焼きも出回っていますが、やはり固くて分厚くて甘すぎない昔ながらの食感と味わいあってこそその栃の実煎餅だ、と感じるのは私だけでしょうか。ただ、歳を重ね歯が弱ってくると堅焼きのものは食べられなくなってしまうだろうな、とも思います。さて、餅に仕上げられなかった実ですが、落下しても割れずに殻に覆われたままだったのも

のを振ってみると微かに音がします。泉鏡花の短編に『栃の実』という作品があります。茶屋の娘から「お土産に」と受け取った栃の実を大事にとっておく主人公ですが、「茶箆 箆の抽斗（ひきだし）深く、時々思い出して手に据えると、殻の裡（なか）で、優しい音がする。」として物語は終わります。そうです、言葉にするのが難しく、カタカタでもないコトコトでもない優しい音がするのです。「優しい」は、音についての描写であると同時に、その娘の印象についてでもあるのでしょうか。

3. 『モチモチの木』

小学生のとき、『モチモチの木』（斎藤隆介作 滝平二郎絵 岩崎書店）（写真4中央）が課題図書になりました。私自身は高学年で課題は別の作品でしたが、担任の伊藤敬昌先生のお薦めで低学年の課題図書だった『モチモチの木』を手に入れました。臆病な豆太が、夜中に腹痛を起こして苦しむじさまのために勇気を奮い立たせて、モチモチの木が襲ってきそうな恐怖と戦いながら暗闇の中を走り、医者さまを呼びに走るお話です。版画も個性的で物語をより印象的にしています。30年近くも前から小学校3年生の国語の教科書に採用され、指導書が書籍となって出版されているほか、ネットには様々な指導案が上げられています。このモチモチの木がトチノキであることを意識したのは実は最近のことです。確かに本を読み返してみると、大木で、実を落とし、餅にする、これは確かにトチノキに他ならないのですが。英語版では、タイトルは“The Tree of Courage”、豆太が名付けたモチモチの木は“Mochi tree”、木は西洋トチノキを指す“a horse chestnut tree”となっています。英語では勇気とはっきり言語化され、日本語の擬態語・擬音語は英語に訳し難く、英語圏では馴染みもあり種類も近い西洋トチノキとなったのですね。

この物語が私の心から離れない最大の理由は、豆太の勇気ある行動というより、臆病な豆太の描写にあります。夜中にひとりで外（おもて）にあるセッチン（便所）に行くことができません。昼間は怖くもなんともないモチモチの木が、夜になると恐ろしくてたまらないからです。毎夜、じさまを起こして外に連れて行ってもらい、しゃがんだじさまに抱きかかえてもらってしょんべんさせてもらうのです。実は私も小さい頃、母の実家のある鈴鹿山脈釈迦ヶ岳の麓にある集落で祖父母たちと夏を過ごしていました。昼間は元気に遊んでいますが、街灯のない村のほぼ真っ暗闇の夜はそれだけでも恐ろしくて、おまけに樹木は昼間より大きく見え、何かを阻むかのようにどっしりと構えているように感じます。夜中に目を覚ますと「おばあちゃん、おしっこ。」と祖母を起こし、一緒に玄関から外に出て軒先で用を足すのです。朝になると、地面は夏の太陽に照らされていますが、夜中のおしっこの「あと」がくっきりと残っています。子ども心にその痕跡が早く消えてくれるように、誰も玄関を通らないように、外から誰も訪れてこないようにと祈ったものです。とはいえ山あいでの暮らしは私には非日常で、従兄弟や又従兄弟たちと遊ぶのは刺激的で楽しく、恥ずかしい思いなんて大抵はすぐに忘れて遊びに夢中になるのですが、いつ

の間にかまた怖い夜がやってきてしまいます。いつまでこうやって祖母を煩わせていたのか思い出せるわけありませんが、自分が我が子に『モチモチの木』の絵本を買って読み聞かせた時、何故かこの記憶が鮮明に蘇りました。今でも昨日の出来事のように。世代が進み孫に読んだ時、「実は、春美**ばあば**も豆太とおんなじで、ひとりでおしっこに行けなかったんだよ。」と言ってみたのですが、どうして外に行かなければならないのかすら理解できない彼らは、キョトンとして全く反応はありませんでした。笑われる覚悟だった私は拍子抜けしてしまったのです。

4. 樹木も人も

新芽の季節に大学のトチノキ並木を見上げる時、決まって心に浮かぶことがあります。ひょっとするとお気づきの方もあるかもしれませんが、正門から入って右側の手前から3本目のトチノキは、他の木々よりずっと遅くに新芽が出てきます。決してその木だけが若いわけでもなさそうですし、弱っているようにも見えません。人間に個性があるように、同種の樹々にも個性（人間のそれと区別して個体差と呼ぶようです）があり、このトチノキはのんびり屋さんなのでしょう。不思議なことに、春はかなり遅れを取りますが、実をつけるのも黄葉するのも落葉するのも時期を外すことはありません。ちなみに、落葉のタイミングも千差万別で、必ずしも日当たりや風当たりだけがその違いを産んでいるわけではなさそうです（写真5）。（さらに付け加えれば、例えば街灯の傍の木は紅葉も落葉も遅いように思います。）樹々に個性があることは、『樹木たちの知られざる生活：森林管理官が聴いた森の声』（ペーター・ヴォールレーベン著 長谷川圭訳 早川書房）にも書かれていて興味深い事実ですが、学生もトチノキのようにそれぞれ个性的で、中にはおっとりさんがいることを忘れないでいたいと思います。

謝辞) この原稿を書くにあたり、あきた森づくり活動サポートセンター総括所長の菅原徳蔵氏から貴重な情報をいただきました。また、宮城学院女子大学 生活環境科学研究所 ミツバチ科学研究部門の藤原愛弓助教にご指導いただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。文中の誤りは全て著者の責によるものです。



写真5 2022年1月25日撮影



□彙報

2021（令和3）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2021年3月1日～2022年2月28日）

以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

受領月日	刊行物名	発行元
0301	青淵 第864号 3月号	渋沢栄一記念財団
0309	琉球だより No.14	沖縄公文書館
0309	國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース	國學院大学
0312	校史 Vol.31	國學院大學研究開発推進機構國學院大學
0331	福澤研究センター通信 第33号	慶應義塾福沢研究センター
0331	東北学院時報 第762号	学校法人東北学院
0331	東京大学 文書館ニュース vol.65	東京大学文書館
0331	東北大学史料館だより No.34	東北大学学術資源研究公開センター史料館
0331	キリスト教史学会報	キリスト教史学会
0408	青淵 第865号 4月号	渋沢栄一記念財団
0408	白金通信 No.506	明治学院大学
0430	明治学院歴史資料館ニュースレター NO.12	明治学院歴史資料館
0430	ニュースレター明治大学史	明治大学史資料センター
0430	近代仙台研究会 第6回発表会 特別講演	近代仙台研究会
0510	青淵 第866号 5月号	渋沢栄一記念財団
0603	青淵 第866号 6月号	渋沢栄一記念財団
0622	東北学院時報 第763号	学校法人 東北学院
0622	京都大学大学文書館だより 第40号	京都大学大学文書館
0622	東北学院大学博物館 情報誌	東北学院博物館
0708	青淵 第868号 7月号	渋沢栄一記念財団

受領月日	刊行物名	発行元
0708	白金通信 No.507	明治学院
0709	國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース	國學院大学
0802	東北学院時報 第764号	学校法人 東北学院
0803	青淵 第869号 8月号	渋沢栄一記念財団
0810	キリスト教史学会報 第180号	キリスト教史学会
0904	青淵 第870号 9月号	渋沢栄一記念財団
1005	青淵 第871号 10月号	渋沢栄一記念財団
1005	白金通信 No.508	明治学院
1007	東京大学文書館ニュース Vol.67	東京大学文書館
1011	東北大学史料館だより No.35	東北大学学術資源研究公開センター史料館
1012	東北学院時報 第765号	学校法人 東北学院
1110	青淵 第872号 11月号	渋沢栄一記念財団
1129	東北学院時報 第766号	学校法人 東北学院
1203	白金通信 No.509	明治学院
1203	青淵 第873号 12月号	渋沢栄一記念財団
1220	キリスト教史学会報 第181号	キリスト教史学会
0105	青淵 第874号 1月号	渋沢栄一記念財団
0113	東北学院時報 第767号	学校法人 東北学院
0203	青淵 第875号 2月号	渋沢栄一記念財団

(2) 書籍関係 (紀要・年報・目録・図録を含む)

受領月日	刊行物名	発行元
0312	GCAS Report Vol.10	学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ学専攻
0312	フェリス女学院歴史資料館紀要 あゆみ 第73号	学校法人フェリス女学院
0331	近代日本研究 第37巻	慶応義塾福沢研究センター
0331	東北学院史資料センター年報 Vol.6	東北学院史資料センター年報編集委員会
0331	立教ディスプレイ Vol.6	立教学院展示館
0331	大東文化大学史研究紀要 第5号	大東文化大学百年史編纂委員会
0331	東北大学史料館研究報告 第16号	東北大学史料館

受領月日	刊行物名	発行元
0331	東京大学文書館紀要 第39号	東京大学文書館
0331	渋沢研究 第33号	渋沢史料館
0331	立教学院史研究 第18号	立教大学 立教学院史資料センター
0331	東洋英和女学院 資料集第7号	東洋英和女学院 史料室委員会
0331	東北の女子ミッション教育の社会史	東北学院大学女子ミッション教育研究会
0430	戦時下の恵泉	恵泉女学園史料室
0430	東洋英和女学院資料集 第7号	東洋英和女学院史料室委員会
0430	専修大学史紀要 第13号	専修大学 大学史料課
0430	学院史料 Vol.34	神戸女学院史料室
0430	明治学院歴史資料館資料集 第17集	明治学院歴史資料館
0430	早稲田大学史紀要 第52巻	早稲田大学大学史資料センター
0430	大学史紀要 第27号	明治大学史資料センター
0801	成瀬記念館2021	日本女子大学成瀬記念館
0915	ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書	学校法人東北学院
0920	キリスト教史学 第75集	キリスト教史学会
1203	『評伝 成瀬仁蔵ー女子高等教育から「社会改良」へー』	学校法人日本女子大学
0105	東京基督教大学創立30周年誌	学校法人東京キリスト教学園
0204	市史せんだい Vol.30	仙台市博物館

(3) 受贈資料

受領月日	刊行物名	発行元
0315	DANE GRAY HANSEN	宮城学院女子大学音楽科様
0406	平和への道Ⅱーほのぐらい灯心を消すことなくー	松尾光章様
0705	宮城女学校をアメリカの教会に紹介するためのポスター	東北学院史資料センター様
0705	1956年宮城学院高等学校第8回生卒業アルバム	東北学院史資料センター様
0712	2020年度 宮城学院女子大学卒業アルバム	(株) 東陽写真 後藤浩策様
1005	<往還>の諸相	今林直樹様
1012	地域に根差し、時代と向き合って 本郷弘一・一戸富士雄 追悼号	大平聡様
0115	大沼隆先生メモリアルCD	大沼和樹様

受領月日	刊行物名	発行元
0113	八戸小中野教会90年のあゆみ	小林よう子様

資料室運営委員会

委員長	嶋田順好	(宮城学院学院長)
委員	田中弘志	(宮城学院理事)
	長井祥子	(宮城学院同窓会会長)
	栗原健	(宮城学院女子大学准教授)
	丸山仁	(宮城学院中学校・高等学校教頭)
	伊藤幸子	(宮城学院女子大学大学事務部庶務課)
陪席	本田辰雄	(宮城学院事務局長)
資料室	佐藤亜紀	(宮城学院事務嘱託職員)

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2021年度 第27号

2022(令和4)年3月31日発行

編集 宮城学院資料室/宮城学院資料室運営委員会

発行 学校法人宮城学院

〒981-8557

宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

電話 022-279-1311(代表)

022-279-7765(資料室直通)

E-mail shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印刷 株式会社 東誠社

〒983-0004 仙台市宮城野区岡田西町1-55

電話 022-287-3351
